

後鑑

卷五	卷四	卷三	卷二	卷一	序 凡例
起建武二年正月 盡八月	起建武元年正月 盡十二月	起元弘三年五月九日 盡十二月	起元弘三年五月二日 盡八日	起元弘元年九月 盡同三年四月	尊氏將軍記

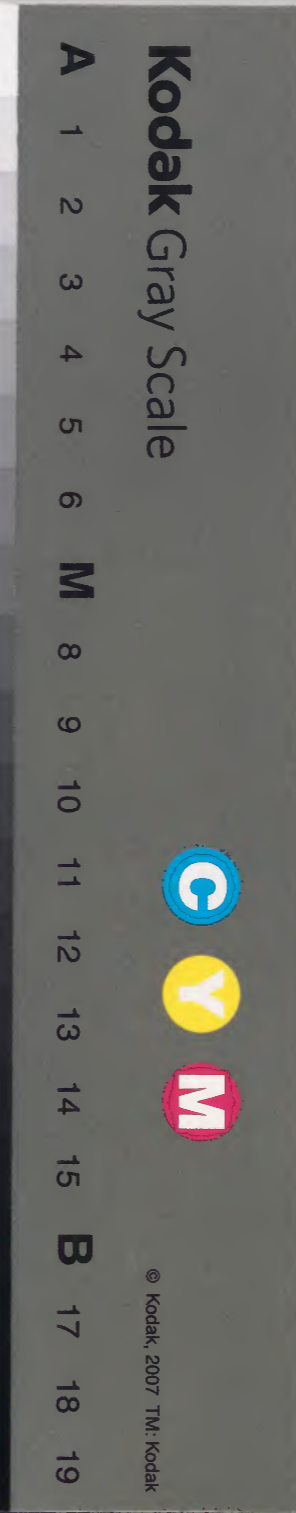
和書門	四	四	四	四	四
類	一	二	三	五	五
函號	架	架	架	架	架
冊	冊	冊	冊	冊	冊

60

内閣文庫	四八	四八
函架	一五	一五

内閣文庫	番號和	44581
	冊數	5 (1)
	函號	148 60

三三類



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

江戸幕府史局編纂
内閣記録局藏版

後鑑

修文堂發兌



刻後鑑序

自軋經斜紐。史官失職。為致
志其事跡。不獲不就。我記日記
以求之。而戰記主軍陣事。開
日記主恒例儀注。且其所載
詳於小而略於大。錯雜抵牾。



後鑑序

者實相才。廣羅博涉。其終
為深。後以其何汗而得見施
改之。概乎哉。物鐘倉庫。府而
撰東鑑。或可以考位焉。天保中。
江戶府開史局。命成島良讓
等。纂室町氏十五世事。勅

成三百六十五卷。名曰後鑑。蓋
續東鑑云。余取而讀之。如於
元弘。終於天正。歷年二百四
十有三。以事繫日。以日繫月。
提其大綱。盡引原書。證之。抽
天祿石渠之祕。及探名山古

利之遺蹟。綴緝蒼華。傳信
正祀。實不刊之典也。折華有
之事。固不足議。然其間又自
有紀綱。而制度法令之可觀者。
不為鮮矣。蓋道衰。民學創
之。當町氏涖歸之。至江戶氏

而大成之。故強求才。今之治。必
不可不先知。幕府之治。而
倉式以降。文獻日衰。室町
氏為京甚。此書刊行之所。以
不可已也。世之讀者。與東鑑
太平記總見於太閤記。垣川

氏實記諸書參觀焉。則於七百
餘年得失成敗之跡。思過半
矣。此書。急在楓山文庫。余
以其久而湮滅。命工印刷。以公
於世。及初帙成。為弁教語於
卷首。

明治廿二年三月六日

內閣記録局長從五位曾補荻助撰



從六位岡守首書



武家ノ記録其體凡そ二様に過ぎ保元平治物語平家物語盛衰記等
 ハ戦記ナリ東鑑花營三代記等ハ日記ナリ戦記ハ軍陣争鬪を詳に
 して日件を畧す日記ハ日用恒儀を主とすれば戦争を次に其今編
 輯する所ハ東鑑の後を繼で室町殿歴世の事を記すれば其體もま
 た東鑑に倣ハざるを得む但彼書ハ當時の編纂にいでこれハ追輯
 に係れば必しも同じからざる事あらむ文に臨み事により其宜を
 量て取捨すべし

後鑑凡例

- 一 武家の記録其體凡そ二様に過ぎ保元平治物語平家物語盛衰記等
 ハ戦記ナリ東鑑花營三代記等ハ日記ナリ戦記ハ軍陣争鬪を詳に
 して日件を畧す日記ハ日用恒儀を主とすれば戦争を次に其今編
 輯する所ハ東鑑の後を繼で室町殿歴世の事を記すれば其體もま
 た東鑑に倣ハざるを得む但彼書ハ當時の編纂にいでこれハ追輯
 に係れば必しも同じからざる事あらむ文に臨み事により其宜を
 量て取捨すべし
- 一 卷首題するに某將軍の記を以てし某年某月に始り某月に終ると
 いふことを注記しまた提頭して某年干支を掲げ一層下して某月
 とし其次ハ日次にして某月某事を冒記し原書を引て次第に附載
 きたとへば今修する所の文ハ綱にして引所の原書ハ目といふも
 の、如し

- 一 事蹟の月ありて日なきハ其月の終に是月云々として一條を別行
キ又年ありて月の忘れざる事ハ卷末に是年云々としてその事を
いだしもし又諸書に異同ある歟あるハ誤謬の類ハ斷案を加へ
て是を辨む
- 一 朝家の御事ハ授禪即位立后立坊等の大儀ハ是を擧るといへども
朝家にのみ限りし節會儀注等ハのせむ但義滿義教の二公天皇元
服の理髮及ひ三節會の内辨を役せられ義持公大嘗會御禊の供奉
義政公八幡放生會の上卿に候せられし類をはじめとしてすべて
幕府にわたりし事ハ全く朝家の儀といへども其事を委記して參
見に備ふ
- 一 管領四職の補任生卒及ひ奉行頭人間注所政所等の諸有司其他各
國諸大名の事蹟たるべきかぎりハ各書譜牒より遍く搜り廣く索
めて是を擧ぐ

- 一 義量義尙二公の薨後に勝定慈照の兩將軍老退を以て幕政を執行
ありし間ハ義持將軍後記義政將軍後記として義教義植二公の任
幕に接キ義植公復職の後もおなじ様なり
- 一 義榮將軍三好松永等が爲に擁立せられしを以て室町將軍の代數
に入れざる論もあれどこの朝臣將軍宣下ありしハまさしく御湯
殿上日記にも見えてまがふべくもなし且この朝臣を除きなバ光
源院殿弑せられし後靈陽院殿の任幕まで一年が程の事蹟ハ誰に
屬すべき依ていま義榮將軍の記を立てその間の事を係記キ
- 一 義昭公出走の後ハ將軍の宣旨を蒙ておハしけれども全く空名に
て織田豊臣二家の事をその記に係べきに非れば出走までを日次
にして正記とし其後卒年までの事蹟は連記して附見す
- 一 毎代將軍の事蹟群書に雜出して日月の知れざるもの又は事の體
本編に載せかぬる類ハ附録として別卷に載キ又本編に記せしも

事のさまによりてハ附録に載せざるを得てこれらも兩所に
 して其事を詳に義政義持の二公ハ前記に附し義植公ハ後記に
 附し

一 南北合和の前南朝の御事も室町殿に關係せし類ハ漏さざといへ
 ども全く南山のこの事ハ附載するに及ばず

一 關東幕府の事も基氏卿の開府より持氏卿の敗亡まで四世の間の
 事ハいふまでもなし其後古河掘越小弓および兩上杉の事に至る
 までその大要を記して東陞の治亂興亡をまらしむ

一 西國の事も鎮西探題の廢置沿革を主としてその盛衰興替必しも
 幕府に關係せざる事といへども畧記して月日の下に出す其他の
 各國も是に同じこれ室町殿兵馬の權を掌握せられければ中世以
 來政令天下に行れざといへども天下の諸大名は元よりその管轄
 する所なればなり

一 天變地妖ハさらなり神怪奇異の事もその時正しく筆記せしハ舊
 に遵て是を擧ぐてべて室町殿の事蹟湮晦して傳らざる事多けれ
 ば少しも引據となるべきハ網羅して漏さざる所なり

一 義滿將軍このかた明國に贈りし書翰及び彼より答へしもの其他
 朝鮮琉球等の往復にいたるまで必を備載して鄰交の顛末を詳に
 せ

一 五山の名僧高緇夢窓虎關以下春屋義堂絶海横川村庵瑞溪等その
 出處進退幕府に關係する事少からざれば方外の徒といへども是
 を載す

一 引書ハ幾種を限らざといへどもまづその大畧は尊氏義詮二公の
 事蹟ハ太平記梅松論保曆間記等にて大體を觀るに足れり其後ハ
 花營三代記齋藤親基記嵯川親元記同親俊記大館常興記等をもて
 正記とし慈氏日工集臥雲日件錄季瓊日録のこときハ僧徒の記な

れども幕府にあづかる事多ければ揀取して採用す多門院日記大乗院舊記もまた同じ

一 室町殿代々府を京師に開かれしゆゑ搢紳家の日記に其事蹟の散見するもの朝家の事を記すと相半せり殊に薩戒記建内記は呢近衆の記なれば一々引用に足れりかの正記とする花營三代記等より遙に詳悉せり其他も數十部に下らば此編第一の引據へ家記をもて主とす

一 太平記をはじめ明德應永嘉吉應仁長祿寛正諸記及び足利季世記室町殿日記の類はた各家の記祿も正しきものへ採用す但軍記の例慣にて無用の事を冗記せるハ畧節に従ふ

一 日記戦記の外第一考據とすべきハ古文書なり其年月日を署せしものへ全載し年月不知又は寺社領證文本領安堵狀等の瑣屑の事ハ必しも擧げ

一 五山僧徒の詩文集ハ蕉堅稿翰林胡蘆集をはじめ幕府に渉る事あるものハ悉く引用せ語録の如きもおなじ

一 式目追加武政軌範等の室町家の令條を載しもの年月に隨て著録を一代の辭令を觀せしめんが爲なり

一 伊勢小笠原武田の家々にて弓馬の禮節を記せし書の内に室町殿の事實散見するもの少からば是また拾取して正記の闕を補ふ所なり

後鑑卷之一
尊氏將軍記第一上
起元弘元年九月
盡三年四月
足利系圖云尊氏母從三位藤原清子上杉修理大夫賴重女號等持寺二
品雪庭禪尼元應元年叙從五位下同日任治部大輔
十五年九月五日去大輔元弘二年六月八日叙從五位上
足利官位記云等持院殿尊氏始高嘉元三年月日御誕生
難太平記云八幡殿とは義家朝臣陸奥守鎮守府將軍の御子義國より
義康義包義氏泰氏など也泰氏を平石殿と申き其御子に賴氏治部大
輔殿と申其御子に家時伊豫守と號其御子に貞氏讚岐入道殿と申其
御子にて大御所錦小路殿ハわたらせ玉ふ也中略大御所の御事を申つ
るに書落間追て申也大御所御うふゆめしける時山鳩二飛來て一は
左の御かたさきにゐる一ハ杓の柄に居けり錦小路殿御生湯の時ハ
山鳩二來て御杓の柄と湯桶のはたに居たりける先代の世に憚て其

後鑑卷之一

尊氏將軍記第一上 起元弘元年九月 盡三年四月

足利系圖云尊氏母從三位藤原清子上杉修理大夫賴重女號等持寺二

品雪庭禪尼元應元年叙從五位下同日任治部大輔 十五歲元服無官 號足利又太郎 同二

十五年九月五日去大輔元弘二年六月八日叙從五位上

足利官位記云等持院殿尊氏 始高 嘉元三年月日御誕生

難太平記云八幡殿とは義家朝臣陸奥守鎮守府將軍の御子義國より

義康義包義氏泰氏など也泰氏を平石殿と申き其御子に賴氏治部大

輔殿と申其御子に家時伊豫守と號其御子に貞氏讚岐入道殿と申其

御子にて大御所錦小路殿ハわたらせ玉ふ也 中略 大御所の御事を申つ

るに書落間追て申也大御所御うふゆめしける時山鳩二飛來て一は

左の御かたさきにゐる一ハ杓の柄に居けり錦小路殿御生湯の時ハ

山鳩二來て御杓の柄と湯桶のはたに居たりける先代の世に憚て其

時ハ披露なかりける當御代に御年ころの人々にも申出にや

元弘元年辛未

九月小

五日戌寅讚岐守貞氏主卒

等持院過去帳云淨妙寺殿贈一品貞山大禪定門

元弘元年九月五日

足利系圖云貞氏讚岐守足利太郎從五位下母平時茂女號淨妙寺殿法名

道觀

常樂記云元弘元年九月六日足利讚岐入道殿逝去

廿七日庚子以後醍醐天皇遷幸笠置北條相摸守高時入道催促高氏主發向京

師

太平記云前ニハ笠置ノ城強シテ國々ノ大勢日夜攻レトモイマダ落ス

後ニハ又楠櫻山ノ逆徒大ニ起テ使者日々ニ急ヲ告南蠻西戎既ニ亂レ

又東夷北狄モ又如何有ンスラント六波羅ノ北ノ方駿河守安キ心モ無

リケレハ日々ニ早馬ヲ打セテ東國勢ヲソ請レケル相摸入道大ニ駭テ

サラハ頓テ討手ヲ差上セヨトテ一門他家宗徒ノ人々六十三人迄ソ催

サレケル大將軍ニハ大佛陸奥守貞直同遠江守普恩寺相摸守鹽田越前

守櫻田參河守赤橋尾張守江馬越前守絲田左馬頭印具兵庫助佐介上總

介名越右馬助金澤右馬助遠江左近大夫將監治時足利治部大輔高氏

梅松論云元弘元年にも笠置城退治の一方の大將として御發向有じ也

元弘日記裏書云九月二十七日貞直貞冬高氏發向笠置城云々

元弘三年癸酉

三月大

廿七日庚申先帝自隱岐國遷御伯耆國船上山官軍蜂起六波羅有危急注進北

條高時命名越尾張守高家及高氏主爲討手大將此日出陣

太平記云先朝船上ニ御坐有テ討手ヲ差上セラレ京都ヲ攻ラル、ヨシ

六波羅ノ早馬頻リニ打テ事既ニ難儀ニ及フ由關東ニ聞ヘケレハ相摸

貞氏九月五日卒シ尊
日ハ同月二
氏ハ同日二
十七日ニ笠
置ニ發向ア
リシハ前ニ
舉シ如クナ
ルヲ三日ナ
終スト太平
記ニ記セシ
ハソノ催促
ノ急ナルヲ
イヒシナル
ヘシ

入道大ニ駭テサラハ重テ大勢ヲ指上セテ半ハ京都ヲ警固シ宗徒ハ船
上ヲ攻ヘシト評定有テ名越尾張守ヲ大將トシテ外様ノ大名二十人ヲ
催サル。足利高氏ヲモ上洛有ヘキノ由度々ニ及テ催促セラレケリ高氏
ハ去年上洛ノ催促ノ時父讚岐守貞氏頓滅ノ事有テイマタ三日ヲ終ス
悲歎ノ涙乾サルニ攻上セラル今年ハ病霧身ヲ侵シテ負薪ノ憂イマタ
休ス又征伐ノタメニ催サル、事返々モ遺恨ナレ。足利高氏ヲモ上洛以下云々異本時移事
變貴賤位ヲ易ト云トモ彼ハ北條四郎時政カ末葉ナリ人臣ニ下テ年久
シ我ハ源家累葉ノ貴族ナリ王氏ヲ出テ遠カラス此理ヲ知ナラハ一度
ハ君臣ノ義ヲモ存スヘキニ是マテノ沙汰ニ及フ事偏ニ身ノ不肖ニヨ
ル故ナリ所詮重テ尙上洛ノ催促ヲ加フル程ナラハ一家ヲ盡シテ上洛
シ先帝ノ御方ニ參六波羅ヲ攻落シテ家ノ安否ヲ定ヘキ者ヲト心中ニ
思立レケルナハ人更ニ知事無リケリ相摸入道ハカ、ルヘキ事トハ思
寄ス工藤左衛門尉ヲ使ニテ御上洛延引心得ラレスト一日ノ中ニ兩度

マテコソ責ラレケレ足利殿ハ反逆ノ企已ニ心中ニ思定ラレケレハ中
々異議ニ及ハス不日ニ上洛仕ヘシトソ返答セラレケル則夜ヲ日ニ繼
テ打立レケルニ御一族郎從ハ申ニ及ハス女性幼稚ノ君達迄モ殘ラス
皆上洛アルヘシト聞ヘケレハ長崎入道圓喜恠シミ思ヒテ急キ相摸入
道ノ方ニ參リテ申ケルハ誠ニテ候ヤラン足利殿コソ御臺君達マテ皆
引具シ進ラセテ御上洛候ナレ事ノ體怪シク存候加様ノ時ハ御一門ノ
疎ナラヌ人ニタニ御心置レ候ヘシ況ヤ源家ノ貴族トシテ天下ノ權柄
ヲ捨給ヘル事年久シケレハ思召立事モヤ候ラン異國ヨリ我朝ニ至迄
世ノ亂タル時ハ霸王諸侯ヲ聚テ牲ヲ殺シ血ヲ飲テ貳心無ラン事ヲ盟
フ今ノ世ノ起請文是ナリ或ハ又其子ヲ質ニ出シテ野心ノ疑ヲ散ス木
曾殿ノ御子清水冠者ヲ大將殿ノ方へ出サレキ加様ノ例ヲ存候ニモ如
何様足利殿ノ御子息ト御臺トチハ鎌倉ニ留申サレテ一紙ノ起請文ヲ
書セ進ラセラルヘキトコソ存候ヘト申ケレハ相摸入道實モトヤ思ハ

レケン頓テ使者ヲ以テ申遣サレケルハ東國ハイマダ世閑ニテ御心安
カルヘキニテ候幼稚ノ御子息ヲハ皆鎌倉ニ留置進ラセラレ候ヘシ次
ニ兩家ノ體ヲ一ニシテ水魚ノ思ヒヲ成レ候上赤橋相州御縁ニ成候彼
此何ノ不審カ候ヘキナレトモ諸人ノ疑ヲ散セン爲ニテ候ヘハ恐ナカ
ラ一紙ノ誓言ヲ留置レ候ハン事公私ニ就テ然ヘクコソ存候ヘト仰ラ
レタリケレハ足利殿胸彌深カリケレトモ憤ヲ抑ヘテ氣色ニモ出サ
レス是ヨリ御返事ヲ申ヘシトテ使者ヲハ返サレテケリ其後舍弟兵部
大輔殿ヲ呼進セラレテ此事如何有ヘキト意見ヲ問ル、ニ暫ク思案シ
テ申サレケルハ今此一大事ヲ思召立事全ク御身ノ爲ニ非ス只天ニ代
リテ無道ヲ誅シ君ノ御爲ニ不義ヲ退ケントナリ其上誓言ハ神モ受ス
トコソ申習シテ候ヘ設詐テ起請ノ詞ヲ載ラレ候トモ佛神ナトカ忠烈
ノ志ヲ守ラセ給ハテ候ヘキ就中御子息ト御臺トハ鎌倉ニ留置進ラセ
ラレン事大義ノ前ノ小事ニテ候ヘハ強ニ御心ヲ煩サルヘキニアラス

公達イマダ御幼稚ニ候ヘハ自然ノ事モアラン時ハ其爲ニ少々殘置ル
、郎從共何方ヘモ懷キ抱テ匿シ奉リ候ナン御臺ノ御事ハ又赤橋殿ト
テモ御坐候ハン程ハ何ノ御痛敷事カ候ヘキ大行ハ不顧細謹トコソ申
候ヘ此等程ノ小事ニ猶豫有ヘキニ非ス兎モ角モ相摸入道ノ申サン儘
ニ從テ其不審ヲ散セシメ御上洛候テ後大義ノ御計畧ヲ運ラサルヘキ
トコソ存候ヘト申サレケレハ足利殿此道理ニ服シテ御子息千壽王殿
ト御臺赤橋相州ノ御妹トハ鎌倉ニ留置奉リ一紙ノ起請文ヲ書テ相摸
入道ノ方ヘ遣サル相摸入道是ニ不審ヲ散シテ喜悅ノ思ヲナシ高氏ヲ
招請有テ様々賞翫共有シニ御先祖累代ノ白旌アリ是ハ八幡殿ヨリ代
々ノ家督ニ傳テ執セラル、重寶ニテ候ケルヲ故頼朝卿ノ後室二位禪
尼相傳シテ當家ニ今迄持トコロナリ希代ノ重寶ト申ナカラ他家ニ於
テ其詮ナク候カ是ヲ今度ノ餞ニ進シ候ナリ此旌ヲ差セテ凶徒ヲ急キ
御對治候ヘトテ錦ノ袋ニ入ナカラ自是ヲ進セラレ其外騎替ノ御馬ニ

トテ飼タル馬ニ白鞍置テ十匹白幅輪ノ鎧十領金作ノ太刀一ツ副テ引レタリケリ足利殿御兄弟吉良上杉仁木細川今川荒川以下ノ御一族三十二人高家ノ一類四十三人都合其勢三千余騎元弘三年三月二十七日鎌倉ヲ立大手ノ大將ト定メラル
難太平記云元弘に御上洛の時不思議の事ありける三河國八橋に御着の時御前無人數の夕に白き衣かつきたる女一人參て云御子孫惡事なくハ七代守るへし其支證にハ毎度合戦に出給ふ時雨風をもつてしめし可申と云て如夢失にけり夫よりしてひしと御むほんの事おほしめし定て爲上杉兵庫入道御使先吉良上總禪門に被仰合しに御返事に云今まてをろくこころ存つれ尤可目出云々其のち人々にも御談合有けり此事關東御立の時より内々上杉兵庫入道ハ申勸けるにや家時貞氏此兩御所の御造意を大方殿の上杉斗に仰きかせられけるとかや是によりにて殊更其人骨を折て河原合戦にうち死さけるとかや今の上杉中務

入道の祖父なり

梅松論云依之京都よりの早馬關東へ馳下る間當將軍尊氏重て討手として御上洛御入洛は同四月下旬なり元弘元年にも笠置城退治の一方の大將として御發向有し也今度は當將軍の父淨妙寺殿御逝去一兩月の中也未御佛事の御沙汰にも及はず御悲涙にたへかねさせたまふ折ふしに大將として都に御進發あるへきと高時禪門申間此上は御異儀に及はず御上洛あり凡大將たる仁躰もたしかたしといへども關東今度の沙汰不可然依之ふかき御恨と聞へし一方の大將は名越尾張守高家これは承久に北陸道の大將軍式部丞朝時の後胤なり
北條系圖云直鎮又次郎忠重子又次郎備中守法名生觀元弘三年源尊氏爲六波羅退治上洛于時供奉數度有軍功其後賜三州梁郡

四月小

三日丙寅此日佐々木源左衛門尉信重及小二郎清秀戰死

佐々木系圖云信重三郎賴重子源左衛門尉元弘三年四月三日作道討死
清秀彦三郎貞泰子小二郎左衛門元弘三年四月三日於關東討死

十六日卯己此日御京着

增鏡云卯月の十日餘又東より武夫多く上る中に去々年笠置へも向たりし治部大輔源高氏上れり院にもたのもしく聞し召て彼伯耆の船上に向ふへきよし院宣給ハせけり東を立しときもうしろめたく二心あるまじきよし疎ならまぢかこと文を書てけれともうこの心や如何あらんかく聞ゆるまぢもありけり云々

太平記云名越尾張守高家二三日先立テ四月十六日ニ京都ニ著給フ

十七日庚辰遣海老名六郎季行於船上請屬官軍勅許之上賜高時追討給旨

是日佐々木彦三孝貞於京戰死

太平記云懸ル處ニ足利殿ハ京著ノ翌日ヨリ伯耆船上へ潛ニ使ヲ進ラセテ御方ニ參ヘキヨシ申サレタリケレハ君殊ニ叡感有テ諸國ノ官軍

ヲ相催シ朝敵追伐スヘキ由ノ綸旨ヲソ成下サレケル

異本太平記云足利殿ハ兼テヨリ海老名六郎季行ヲ潛ニ伯耆船上へ進ラセラレテ關東ノ不義唯天誅ヲ招ク時ヲ得テ候ヘハ高氏モ御方ニ參奉公ノ忠勤ヲ致シ涯分ニ恩化ヲ仰キ奉ルヘシトソ奏セラレケル君殊ニ叡感有テ早ク諸國ノ官軍ヲ催シ不日ニ朝敵ヲ追伐スヘキヨシ綸旨ヲ成ル云々

光明寺藏書殘篇載綸旨云

被綸旨俯前相摸守平高時法師猥背君臣之禮節不顧國家之軌範掠領諸國勞苦萬民僭亂之至何事如之早已爲朝敵不遁天罰速相率軍兵追討凶徒勳功賞宜依請者依天氣狀如件年月蠹損

佐々木系圖云孝貞二郎光貞子彦二元弘三年四月十七日於京討死

廿七日庚寅六波羅合戰名越尾張守高家敗死尊氏主令赴丹波國篠村給○給書於島津五郎三郎忠兼許被命合力事

太平記云四月廿七日ニハ八幡山崎ノ合戦ト兼テヨリ定ラレケレハ名
 越尾張守大手ノ大將トシテ七千六百餘騎鳥羽ノ作道ヨリ向ハル足利
 治部大輔高氏ハ搦手ノ大將トシテ五千餘騎西岡ヨリソ向ハレケル略中
 サル程ニ搦手ノ大將足利殿ハ未明ニ京都ヲ立給ヒヌト披露アリケレ
 ハ追手ノ大將名越尾張守サテハ早人ニ先ヲ懸ラレヌト安カラス思ヒ
 テサシモ深キ久我暇ノ馬ノ足モ立ヌ泥土ノ中ヘ馬ヲ打入我先ニトソ
 前ミケル尾張守ハ元ヨリ氣早ノ若武者ナレハ今度ノ合戦人ノ耳目ヲ
 驚ス様ニシテ名ヲ揚ニスル者ヲト兼テ有増ノ事ナレハ其日ノ馬物具
 笠驗ニ至ルマテアタリヲ輝シテ出立レタリ略中動レハ軍勢ヨリ先ニ進
 出テアタリヲ拂テ懸ラレケレハ馬物具ノ體軍立ノ様今日ノ大手ノ大
 將ハ是ナメリト知ヌ敵ハ無リケリサレハ敵モ自餘ノ葉武者共ニハ目
 ヲ懸ス此ニ開キ合彼ニ攻合テ是一人ヲ討ントシケレトモ鎧ヨケレハ
 裏カ、スル矢モナシ打物ノ達者ナレハ近ツク敵ヲ斬テ落ス其勢參然

タルニ辟易シテ官軍數萬ノ士卒已ニ開靡ヌト見ヘタリケル爰ニ赤松
 ノ一族ニ佐用左衛門三郎範家トテ強弓ノ矢繼早野伏戰ニ心キ、テ卓
 宣公カ秘セシ所ヲ我物ニ得タル兵アリ態物具ヲ脱テ歩立ノ射手ニ成
 畔ヲ傳ヒ藪ヲ潛リテトアル畔ノ陰ニヌハレ伏大將ニ近付テ一矢子ヲ
 ハントソ待タリケル尾張守ハ三方ノ敵ヲ追マクテ鬼丸ニ付タル血ヲ
 笠驗ニテ押拭扇開ツカフテ思事モナケニ控タル所ヲ範家近々ト子ヲ
 ヒ寄テ引ツメテ丁ト射其矢思フ矢ツホヲ違ヘス尾張守カ兜ノ眞額ノ
 ハツレ眉間ノ眞中ニ中テ腦ヲ碎キ骨ヲ破リテ頸ノ骨ノハツレハ矢サ
 キ白ク射出シタリケル間サシモノ猛將ナレトモ此矢一筋ニ弱テ馬ヨリ
 眞逆ニトウト落範家胡籙ヲ叩テ矢叫ヲナシ寄手ノ大將名越尾張守ヲ
 ハ範家カ只一矢ニ射殺シタルソ續ケヤ人々ト呼リケレハ引色ニ成ツ
 ル官軍共是ニ機ヲ直シ三方ヨリ勝鬨ヲ作テ攻合ス尾張守ノ郎從七千
 餘騎シトロニ成テ引ケルカ或ハ大將ヲ討セテ何クヘカ歸ヘキトテ引

返テ討死スルモアリ或ハ深田ニ馬ヲ馳コフテ叶ハテ自害スルモアリ
サレハ狐河ノ端ヨリ鳥羽ノ今在家マテ其道五十餘町カ間ニハ死人尺
地モナク伏ニケリ
又云追手ノ合戦ハ今朝辰刻ヨリ始テ馬煙東西ニ靡キ鬨聲天地ヲ響カ
シテ攻合ケレトモ搦手ノ大將足利殿ハ桂河ノ西ノ端ニ下居テ酒盛シ
テオハシケル角テ數刻ヲ經テ後追手ノ合戦ニ寄手打負テ大將既ニ討
レヌト告タリケレハ足利殿サラハイサヤ山ヲ越ントテ各馬ニ打騎テ
山崎ノ方ヲ遙ノ餘所ニ見捨テ丹波路ヲ西へ篠村ヲ差テ馬ヲ早メラレ
ケリ
天正本云高氏ハ大原野ニ陣ヲ取テ酒宴終日ニ及ケルカ寺僧ヲ召レ寺
號ヲ尋子給へハ勝持寺ト申ト答ケル天下ノ戦ニ勝テ持ハ名詮自性目
出タシトテ大庄一所永代寄附セラレケル云々
又云六波羅ニハ高氏サへ敵ニ成給ヒヌレハ心細クソ思ハレケル越前

國ニモ足利尾張孫三郎高經ノ長男幸鶴丸旗ヲ舉義兵ヲ起スト聞ヘシ
カハ南方西國北陸道穩ナル心モナシ是ニ就テモ今マテ附纏タル兵共
モ心ヲ置ヌ人モナシ云々
梅松論云兩大將同時に上洛有テ四月廿七日同時に又都をいて給ふ將
軍ハ山陰丹波丹後を経て伯耆へ御發向有へきなり高家は山陽道播磨
備前を経て同伯耆へ發向せしめ船上山を攻らるへき議定有て下向の
所久我繩手ををいて手合の合戦に大將名越尾張守高家討るゝ間當手
の軍勢戦に及まして悉く都に歸る同日將軍は御領所丹波國篠村に御
陣を召る
北條系圖云高家遠江守貞家子尾張守元弘三年四月廿七日於久我繩手
討死
難太平記云六波羅合戦の時大將名越討れしかは今一方の大將足利殿
先皇に降參せられけりど大平記に書たりかへきく無念の事なり此

記の作者は官方深重の者にて無案内にて押て如此書たるにや寔に尾籠のいたりなり尤切出さるへきをやきへて此太平記書あやまりも空ことものをほきにや昔等持寺にて法勝寺の惠珍上人此記を先三十余卷持参し給ひて錦小路殿の御目にかけられしを玄惠法印によませられしにをほく惡とも誤も有しかは仰に云是は且見及ふ中にも以の外ちかひめおほし追て書入又切出すへき事等有其程不可有外聞之由仰有し後に中絶也近代重て書續けり次てに入筆共を多く所望してかゝせければ人高名數をしらす書りさるから隨分高名の人々も且勢そろへ斗に書入たるもあり一向畧したるも有にや今ハ御代重行て此三四年以來の事たにも無跡形事とも任雅意て申めれば哀く其代の老耆共在世に此記の御用捨あれかごと存也平家は多分後徳記のたしかなるにて書たるなれどもそれたにもかくちかひめありとかやまして此記は十か八九につくり事にや大かたハちかふへからき人々の高名など

の偽りれほかるへしまさしく錦小路殿の御所にて玄惠法印讀て其代の事ともむねとかの法勝寺上人の見聞給ひしにたに如此惡言有しかハ唯をさへて難し申にあらき
島津文書載

自伯耆國蒙 勅命候之間參候相催一族可有合力候恐々謹言

四月廿七日

御判

周防五郎三郎殿

廿九日^{壬辰}給書於島津上総入道被命合力事

島津文書載

自伯耆國蒙 勅令候之間參候令合力給候者本意候恐々謹言

四月廿九日

高氏判

島津上総入道殿

是月加治屋三郎次郎政高捧軍忠申狀

集古文書載

出雲國大野庄加治屋三郎次郎日置政高謹言上欲早預嚴密御注進於東寺造道並竹田河原合戰抽軍忠間事
右者三日於大手東寺造道政高被疵同八日合戰抽軍忠畢然者早預御注進爲蒙恩賞粗言上如件

元弘三年四月日

[Faded bleed-through text from the reverse side of the page]

後鑑卷之二

尊氏將軍記第一之中

起元弘三年五月二日 盡同三年五月八日

元弘三年 癸酉

五月大

二日 甲午 依從船上賜綸旨使上請文給 此夜於鎌倉高氏主二子千壽王道出

大藏谷嫡男竹若於駿河國爲東使被害

光明寺藏書殘篇載綸旨 教

綸旨重令拜見候任勅命先日捧領狀之請文彌可抽軍忠候以此旨可令

奏聞給候誠惶誠恐謹言

元弘三年五月二日

前治部大輔高氏

太平記云足利治部太輔高氏敵ニ成給ヒヌル事道遠ケレハ飛脚イマダ

到來セス鎌倉ニハ會テ其沙汰モ無リケリ懸リシ處ニ元弘三年五月二

日夜半ニ足利殿ノ二男千壽王殿 義詮 大藏谷ヲ落テ行方シラス成給ヒケ

集古文書作
三日

リ是ニ依テ鎌倉中ノ貴賤スハヤ大事出來ヌルハトテ騒動斜ナラス京
 都ノ事ハ道遠キニ依テイマタ分明ノ説モ無リケレハ每事心元ナシト
 テ長崎勘解由左衛門入道ト諏訪左衛門入道ト兩使ニテ上セラレケ
 ル處ニ六波羅ノ早馬駿河高橋ニテソ行逢ケル名越殿ハ討レ給フ足利
 殿ハ敵ニ成給ヌト申ケレハサテハ鎌倉ノ事モ覺束ナシトテ兩使ハ取
 テ返シ關東ヘソ下リケル爰ニ高氏ノ長男竹若殿ハ伊豆ノ御山ニオハ
 シケルカ身宰相法印良遍兒同宿十三人山伏ノ姿ニ成テ竊ニ上洛シ給
 ヒケルカ浮島カ原ニテ彼兩使ニソ行逢給ヒケル諏訪長崎生捕奉ラン
 ト思フ處ニ宰相法印是非ナク馬上ニテ腹切テ道ノ傍ニソ伏給ヒケル
 長崎サレハコソ内ニ野心ノアル人ハ外ニ遁ル、辞ナシトテ竹若殿ヲ
 竊ニ刺殺シ奉ル同宿十三人ヲ首ヲ刎テ浮島原ニ懸テソ通リケル
 足利系圖云竹若尊氏謀反之時伊豆國走湯山賴中坊同心忍上洛之處東
 使參會無據陳謝於駿河國江尻原自害其墓猶有彼地母加子六郎女號雲

光院殿

七日巳於丹波國篠村八幡祠前被舉義旗納願書於同祠給其後共諸手官軍
 責六波羅及夜六波羅沒落北條左近將監時益同越後守仲時護主上光院
 上皇花園東走時益敗死

梅松論云抑將軍ハ關東誅伐の事累代御心の底にさしはさまる、上細
 川阿波守和氏上杉伊豆守重能兼日潛に綸旨を賜て今御上洛の時近江
 國鏡驛にをいて披露申され既に勅命を蒙らしめ給ふ上は時節相應天
 命の授所なり早々思召立へきよし再三諫申されける間當所篠村の八
 幡宮の御寶前にをいて既に御旗を上らる柳の大木の梢に御旗を立ら
 れたりき是は春の陽の精は東よりきさし始む隨て柳は卯の木なり東
 を司て王とす武將も又卯の方より進發せしめ給ふて順に西にめぐり
 たる相生の夏の季に朝敵を亡し給ふへき謂なりまかる程に京中に充
 滿せし軍勢共御味方に馳參する事雲霞のことし則篠村の御陣を嵯峨

へ移され近日洛中へ攻寄らるへきよしうの聞へあり
難太平記云丹州篠村八幡宮の御前にて御旗揚給ひしに御願書を引田
妙源書しどはみへたり同時に兩御所の御上矢を一宛神前に被進しに
役人二人有けり一人は一色右馬介一人は今川中務大輔なり此事は子
細有事にて無口傳人は誤も有にや此事などは尤書入られて氣味可有
にや此中務大輔とは我等か兄の範氏の事なり
今川に細川をひて出ぬれば堀くちきれて新田なかるゝ
など云落書も有けり平家にも赤しるし白たなこひに取かへて頭に纏
小入道哉と云比興の事もあれは是も書くへたらましかは此人々の
子孫のため面目ならまじ細川ハ卿公事云々

太平記云サル程ニ足利殿篠村ニ陣ヲ取テ近國ノ勢ヲ催サレケルニ當
國ノ住人ニ久下彌三郎時重ト云者二百五十騎ニテ眞前ニ馳參其旗ノ
紋笠驗ニ皆一番ト云文字ヲ書キタリケル足利殿是ヲ御覽シテ恠シク

覺シケレハ高右衛門尉師直ヲ召レテ久下ノ者共カ笠驗ニ一番ト云字
ヲ書タルハ元來ノ家ノ紋カ又是へ一番ニ參タリト云シルシカト尋給
ヒケレハ師直畏テ由緒アル紋ニテ候彼カ先祖武藏國ノ住人久下二郎
重光頼朝大將殿土肥ノ杉山ニテ御旗ヲ舉ラレテ候ケル時一番ニ馳參
シテ候ケルヲ大將殿御感候テ若我天下ヲ保ハ一番ニ恩賞ヲ行フヘシ
ト仰ラレテ自一番ト云文字ヲ書テタマヒケルヲ頓テ其家ノ紋ト成テ
候ト答申ケレハサテハ是カ最初ニ參タルコソ當家ノ吉例ナレトテ御
賞翫殊ニ甚シカリケリ元來高山寺ニ楯籠リタル足立萩野兒島和田位
田本庄平庄ノ者共計コソ今更人ノ下風ニ立ヘキニアラストテ丹波ヨ
リ若狭へ打越テ北陸道ヨリ攻上ラントハ企ケレ其外久下長澤志宇知
山内葦田余田酒井波賀野小山波々伯部其外近國ノ者共一人モ殘ラス
馳參ケル間篠村ノ勢程ナク聚テ其數既ニ二萬三千餘騎ニ成ニケリ
明レハ五月七日寅刻ニ足利治部大輔高氏朝臣二萬五千餘騎ヲ率シテ
略中

篠村宿ヲ立給フ夜イマタ深カリケレハ閑ニ馬ヲ打テ東西ヲ見給フ處ニ篠村宿ノ南ニ當テ陰森タル故柳疎槐ノ下ニ社壇有ト覺テ燒スサヒタル庭燎ノ影ノホノカナルニ宜禰カ袖振鈴ノ音幽ニ聞ヘテ神サヒタリ如何ナル社トハ知子トモ戰場ニ赴ク門出ナレハトテ馬ヨリ下兜ヲ脱テ叢祠ノ前ニ跪キ今日ノ合戰事故ナク朝敵ヲ對治スル擁護ノ力ヲ加ヘ給ヘト祈誓ヲコラシテソチハシケル時ニ賽シケル巫ニ此社ハ如何ナル神ヲ崇メ奉リタルソト問給ヒケレハ是ハ中頃八幡ヲ遷シ進ラセテヨリ以來篠村ノ新八幡ト申候ナリトソ答申ケル足利殿サテハ當家尊崇ノ靈神ニテオハシマシケリ機感最相應セリ宜ニ隨テ一紙ノ願書ヲ獻ハヤト宣ケレハ匹檀妙玄鎧ノ引合ヨリ矢立ノ硯ヲ取出シテ筆ヲ引ヘテ是ヲ書其詞云

敬白祈願之事

夫以八幡大菩薩者聖代前烈之宗廟源家中興之靈神也本地内證之月

高懸于十萬億土之天垂跡外融之光明冠於七千餘座之上觸緣雖分化聿未享非禮之奠垂慈雖利生偏期宿正直之頭偉哉爲其德矣舉世所以盡誠爰承久以來當棘累祖之家臣平氏末裔之邊鄙恣執四海之權柄橫振九代之猛威剩今遷聖主於西海之浪困貫頂於南山之雲惡逆之甚前代未聞也是爲朝敵之最爲臣之道不致命乎又爲神敵之先爲天之理不下誅乎高氏苟見彼積惡未遑顧匪躬將以魚肉之菲偏當刀俎之利義卒勦力張旂於西南之日上將軍鳩嶺下臣軍篠村共在于瑞籬之影同出乎擁護之懷函蓋相應誅戮何疑所仰百王鎮護之神約也係勇於石馬之汗所憑累代歸依之家運也寄奇於金鼠之咀神將與義戰耀靈威德風加草而靡敵於千里之外神光代劔而得勝於一戰之中丹精有誠玄鑒莫誤矣敬白

元弘三年五月七日
源朝臣高氏敬白

トソ讀上タリケル文章玉ヲ綴テ詞明ニ理濃ナレハ神モ定テ納受シオ

ハシマスラント聞人皆信ヲコラシ士卒悉ク憑テ懸奉リケリ足利殿自
 ラ筆ヲ執テ判ヲ居給ヒ上差ノ鏑一筋副テ寶殿ニ納ラレケレハ舍弟直
 義期臣ヲ始トシテ吉良石堂仁木細川今川荒川高上杉以下相從フ人々
 我モ我モト上矢一ツ、獻リケル間其矢社壇ニ充滿テ塚ノ如クニ積上
 タリ夜既ニ明ケレハ前陣進テ後陣ヲ待毛利家天正本云相從フ人々ニハ舍弟兵部大輔直義吉良上總入道省觀子息上總
三郎滿義尾張彌三郎高經澁川次郎義季一色太郎入道道猷島山上野介高國細川八郎四郎
 賴直同彌八和氏上野太郎入道小股孫太郎上杉兵部入道道勸小笠原孫五郎胤長同五郎賴
 氏高左衛門入道貞忍子息右衛門尉師直高次郎重成南部八郎宗繼宇都宮參河守同石見
 六郎志水彌三郎光宗安保次郎光泰設樂富永ヲ始トシテ宗徒ノ兵二萬五千余騎ナリ云々
 大將大江山峠ヲ打越給ヒケル時山鳩一番飛來テ白旗ノ上ニ翩翾ス是
 八幡大菩薩ノ立翺テ守セ給フ驗ナリ此鳩ノ飛行ンスルニ任テ向フヘ
 シト下知セラレケレハ旗指馬ヲ早メテ鳩ノ跡ニ附テ行程ニ此鳩閑ニ
 飛テ大内ノ舊跡神祇官ノ前ナル樗木行ノニソ留リケル官軍此奇瑞ニ勇
 テ内野ヲ指テ馳向ケル道スカラ敵五騎十騎旗ヲ卷兜ヲ脱テ降參ス足
 利殿篠村ヲ出給ヒシ時ハ僅ニ二萬餘騎有シカ右近馬場ヲ過給ヘハ其勢

五萬餘騎ニ及ヘリ又云六波羅ニハ六萬餘騎ヲ三手ニ分テ一手ヲハ神
 祇官ノ前ニ控サセテ足利殿ヲ防セラレ一手ヲハ東寺ヘ差向テ赤松ヲ
 防セラレ一手ヲハ伏見ノ上ヘ向テ千種殿ノ寄ラル、竹田伏見ヲ支ラ
 ル已刻ノ始メヨリ大手搦手同時ニ軍始リテ馬烟南北ニ靡闕聲天地ヲ
 響ス内野ヘハ陶山ト河野トニ宗徒ノ勇士二萬餘騎ヲ副テムケラレタ
 レハ官軍モ左右ナク懸入ス敵モ輒ク懸出ス兩陣互ニ支テ只矢軍ニ時
 ナソ移シケル略中又源氏ノ陣ヨリ紺ノ唐綾威ノ鎧ニ鍬形打タル兜ノ緒
 ナシメ五尺餘ノ太刀ヲ拔テ肩ニ懸敵ノ前半町許ニ馬ヲ驅寄テ高聲ニ
 名乗ケルハ八幡殿ヨリ以來源氏代々ノ侍トシテ流石ニ名ハ隱ナケレ
 共時ニ名ヲ知ラレ子ハ然ルヘキ敵ニ遇カタシ是ハ足利殿ノ御内ニ大
 高二郎重成ト云者ナリ先日度々ノ合戦ニ高名シタリト聞ユル陶山備
 中守河野對馬守ハオハセメカ出合給ヘ打物シテ人ニ見物セサセント
 云儘ニ手繩カイクリ馬ニ白沫カマセテ控タリ陶山ハ東寺ノ軍強シト

テ俄ニ八條へ向ヒタリケレハ此陣ニハナシ河野對馬守計一陣ニ進テ
在ケルカ大高ニ詞ヲ懸ラレテ元來タマラヌ懸武者ナレハナシカハ少
モタメラフヘキ通治是ニ在ト云儘ニ大高ニ組ント相近ツク是ヲ見テ
河野對馬守カ猶子ニ七郎通遠トテ今年十六ニ成ケル若武者父ヲ討セ
シトヤ思ヒケン眞前ニ馳塞テ大高ニ押雙テムスト組大高河野七郎カ
總角ヲ廻テ中ニ提ケ已程ノ小者ト組テ勝負ハスマシキソトテ差ノケ
テ鎧ノ笠驗ヲ見ルニ其紋傍折敷ニ三文字ヲ書テ著タリケリサテハ是
モ河野カ子カ姪カニテアラント打見テ片手打ノサケ切ニ諸膝懸ス斬
テ落シ弓長三杖許投タリケル對馬守最愛ノ猶子ヲ目前ニ討セテナシ
カハ命ヲ惜ムヘキ大高ニ組ント諸鎧ヲ合テ馳懸ル處ニ河野カ郎等共
是ヲ見テ主ヲ討セシト三百餘騎ニテ喚テ懸ル源氏又大高ヲ討セシト
一千餘騎ニテ喚テ懸ル源平互ニ入亂テ黒烟ヲ立テ攻戰フ官軍多ク討
レテ内野へハツト引源氏新手ヲ入易テ戰フニ六波羅勢若干討レテ河

原へサツト引ハ平氏新手ヲ入易テ此ヲ先途ト戰フ一條二條ヲ東西へ
追ツ返ツ七八度カ程ソ揉合タル源平兩陣諸共ニ互ニ命ヲ惜マ子ハ剛
臆何レトハ見ヘサリケレトモ源氏ハ大勢ナレハ平氏遂ニ打負テ六波
羅ヲ指テ引退ク又云糟谷三郎宗秋六波羅殿ノ御前ニ參テ申ケルハ御
方ノ御勢次第ニ落テ今ハ千騎ニタラヌ程ニ成テ候此御勢ニテ大敵ヲ
防カン事ハ叶ハシトコソ覺候へ東一方ヲハ敵イマダ取マハシ候ハ子
ハ主上上皇ヲ取奉リテ關東へ御下リ候テ後重テ大勢ヲ以京都ヲ攻ラ
レ候ヘカシ佐々木判官時信勢多ノ橋ヲ警固シテ候ヲ召具セラレハ御
勢モ不足候マシ時信御供仕ル程ナラハ近江國ニ於テハ手指者ハ候マ
シ美濃尾張參河遠江ニハ御敵アリトモ承ラ子ハ路次ハ定テ無爲ニソ
候ハンスラン鎌倉ニ御着候ナハ逆徒ノ對治踵ヲ旋スヘカラス先思召
立候ヘカシ是程ニアサマナル平城ニ主上上皇ヲ籠進ラセテ名將匹夫
ノ鋒ニ名ヲ失ハセ給ハン事口惜カルヘキ事ニ候ハスヤト再三強テ申

ケレハ兩六波羅實モトヤ思ハレケンサラハ先女院皇后北政所ヲ始進
 ラセテ面々ノ女性少キ人々ヲ忍ヤカニ落シテ後心閑カニ一方ヲ打破
 テ落ヘシト評定有テ小串五郎兵衛尉ヲ以テ此由院内へ申サレタリケ
 レハ國母皇后女院北政所内侍上童上臈女房達ニ至マテ城中ニ籠リタ
 ルカ恐シサニ思ハヌ別ノ悲シサモ後如何ニ成行ンスル様ヲモ知ス徒
 跳ニテ我先ニト迷出給フ略中南方左近將監時益ハ行幸ノ御前ヲ仕テ打
 ケルカ馬ニ騎ナカラ北方越後守ノ中門ノ際マテ打寄テ主上ハヤ寮ノ
 御馬ニ召レテ候ニナトヤ長々シク打立セ給ハヌソト云捨テ打出ケレ
 ハ仲時力ナク鎧ノ袖ニ取附タル北ノ方少キ人ヲ引放シテ縁ヨリ馬ニ
 打騎北門ヲ東へ打出給へハ捨置レシ人々泣々左右へ別レテ東ノ小門
 ヨリ迷出給フ行々泣悲ム聲遙ニ耳ニ留リテ離モヤラヌ悲シサニ落行
 前ノ路暮テ馬ニ信テ歩セ行是ヲ限ノ別トハ互ニ知ヌソ哀ナル十四五
 町打延テ跡ヲ顧レハ早兩六波羅ノ館ニ火懸テ一片ノ烟ト焼上タリ五

月關ノ比ナレハ前後モ見ヘス暗キニ苦集滅道ノ邊ニ野伏充滿テ十方
 ヨリ射ケル矢ニ左近將監時益ハ頸ノ骨ヲ射ラレテ馬ヨリ倒ニ墮ヌ糟
 谷七郎馬ヨリ下テ其矢ヲ拔ハ忽ニ息止ニケリ
 梅松論云五月七日卯時將軍の御勢嵯峨より内野に充滿す先陣ハ神祇
 官を前に當て、東向に控六波羅勢ハ白川を上りにへて二條大宮を阻
 て西向に控たりしか辰刻はかりに兩陣互にすゝみ合て上矢の鏑響
 渡り鬨聲聞る程をありし入亂れて互に今日を最期と相戦ひけり馬の
 足音矢叫の音天にもひゝき地も動くはかりなり入替く數か度に及
 ふ間命を隕し創を被るもの數を知す中にも將軍の御内設樂五郎左衛
 門尉眞前かけて討死して忠節の心をあらはしけるころ哀なれ未時は
 かりに大宮の戦破れて六波羅勢引退く御方の下の手ハ作路竹田より
 攻入ける九條邊に數か所に見へて方々の寄手洛中へ亂入けれハ六波
 羅勢ハ城郭に引こもりける其中に家を思ひ名を惜む勇士どもハかけ

出て戦ひしほどに七日の暮しけり去程に御方にはこの大勢にて時刻をうつさす城郭をかこみことく討取へきよし諸人諫め申ける處に細川阿波守申されける然の如くならんに敵思ひ切て御方多く損すへし一方をあけて没落せしめハ敗軍に成てハ御對治容易かるへきよし申されける間尤然るへしとて一方を明られけりかゝりしほどに城の内に多く心變りして將軍の御方へ參しける兩六波羅の北の方ハ越後守仲時南の方ハ越後親衛時益相議していハく我等命ををどさは同じくハ帝都にて屍をさらさむこと尤本意なれども夫ハ私の議也當所皇居たる間討死自害せしめハ禁裏仙洞の御爲然るへからすまづ行幸を洛外になし奉りて關東の合力をも相待またハ金剛山をかこめる勢共ハ事の由を通して合戦を致へし然らハ再ハ洛中に攻入むこと時刻を廻すへからすとこのよしを奏聞申けれハ勅答にハよろしく武家の心にまかすへきよし仰出さる間七日の夜半に六波羅を御出有て

苦集滅道を経て東に赴て勢田の橋をも渡りしかは野路邊にて天既に明ぬ供奉の卿相雲閣ハならハさる山路のふかき夏草の露をわけいらせ給へハなみたもともにあらそひていと御袖ぬれまさりけるかゝる所に守山邊より野伏とも山野に走散て敗軍を追つめける程に討とられ創を被るもの數をしらす其夜ハ近江國觀音寺を一夜の皇居とす云々
増鏡云高氏ハいにしへの頼義朝臣の名残なりけれハ元のねさしハやむことなき武士なれと承久より以來頭差出す源氏もなくて埋れ過しかれら類ひろく勢よみにみちて國々に心よせの者多かれハかやうに國の危き折を得て思ひ立道もやあらむなど下にさゝめくもしるく伯耆國へむかふへしといひなして先西山大原わたりに一泊りして五月七日ほのくど明るほどより大宮の城戸とも推開て二條よりしも七條の大路を東さまに七手に分て旗を指續て六波羅をさして雲霞のこ

とくたなひき入に更に面を向ふものなと此治部大輔はやうより先帝の勅を賜りけれはさかさまに都を亡さんとするなりけり関つくとかやいふ聲ハ雷の落かゝるやうに地の底もひゞき梵天の宮の中も聞驚き給ふらむと思ふばかりどよみあひたるさまきしかたゆくさきくれて物おほゆる人もなし御門春宮院の上宮達などましてひとりさかときもおはしまさす系竹のまらへをのみきこしめしならひたる御心ともにめすらかにうとましけれハ只あきれ給へり武士とも中半を分て金剛山へむかひたれはさならぬ残り都にあるかきりハ戦をおす今を限の軍なれハ手をつくしてのゝしる程まねひやらんかたあし雨のあしよりもしけく走り違ふ矢にあたりて目の前に死を受るもの數をまらす一日一夜入揉とよみ明すに六波羅残る手なく塞つれと終に陣の内破られて今ハ角と見へたり日頃侍ひ籠り給へる上達部殿上人なども今日と思ひまふけたらんたに君のおはしまさむ限りハ争かまか

てもちらんまして兼てよりかく構けるをもまろしめさて昨日かどよ當代の宣旨を賜りしものゝかくうら返りぬれハ誰う思ひ寄むすへて上下どなくひとつに立込て周章まどひたり日暮し入幡山崎竹田宇治勢多深草法性寺など燃上る烟とも四方の空みちみちて日の光も見へす墨を磨たるやうにてくれぬこゝにも火懸りていと淺ましけれハ云々

北條系圖云時益越後守時敦子左近將監六波羅没落時中矢死

伴系圖云設樂五郎左衛門尉資綱元弘二年五月七日合戰神祇官前ニテ齋藤伊豫房玄基組打死了

伴系圖云資郷富永四郎左衛門尉元弘三年五月七日於二條大宮進先陣卯時討多敵被打畢

八日庚子此日於關東新田小太郎義貞奉勅起義兵理部若君千壽王馳屬義貞陣

太平記云新田太郎義貞去ル三月十一日先朝ヨリ綸旨ヲ賜タリシカハ千劔破ヨリ虛病シテ本國へ歸リ便宜ノ一族達ヲ竊ニ集テ謀反ノ計畧ヲソ運サレケル^中相摸入道此事ヲ聞テ大ニ忿テ宣ケルハ當家世ヲ執テ既ニ九代海内悉其命ニ隨ハスト云事更ニナシ然ニ近代遠境動スレハ武命ニ隨ハス近國常ニ下知ヲ輕スル事奇怪ナリ剩藩屏ノ中ニシテ使節ヲ誅戮スル條罪科輕キニ非ス此時若緩々ノ沙汰ヲ致サハ大逆ノ基ト成ヌヘシトテ即武藏上野兩國ノ勢ニ仰テ新田太郎義貞舍弟脇屋次郎義助ヲ討テ進ラスヘシトソ下知セラレケル義貞是ヲ聞テ宗徒ノ一族達ヲ集テ此事如何有ヘキト評定有ケルニ異議區々ニシテ一定ナラス或ハ沼田庄ヲ要害ニシテ利根河ヲ前ニ當テ敵ヲ待ント云議モアリ又越後國ニハ大畧當家ノ一族充滿タレハ津張郡へ打超テ上田山ヲ伐塞キ勢ヲ附テヤ防クヘキト意見定ラサリケルヲ舍弟脇屋次郎義助暫思案シテ進出テ申サレケルハ弓矢ノ道死ヲ輕シテ名ヲ重スルヲ以

テ義トセリ就中相摸守天下ヲ執テ百六十餘年今ニ至マテ武威盛ニ振テ其命ヲ重セスト云處ナシサレハ縦利根河ヲサカフテ防クトモ運盡ナハ叶フマシ又越後國ノ一族ヲ憑タリトモ人ノ意不和ナラハ久シキ謀ニアラス指タル事モ仕出サヌ物故ニ此彼へ落行テ新田ノ某コソ相摸守ノ使ヲ斬タリシ咎ニ依テ他國へ逃テ討レタリシナント天下ノ人口ニ入ラン事コソ口惜ケレトモ討死ヲセンスル命ヲ謀叛人ト謂レテ朝家ノ爲ニ捨タランニハ無ラン跡マテモ勇ハ子孫ノ面ヲ悅ハシメ名ハ路徑ノ尸ヲ清ムヘシ先タツテ綸旨ヲ下サレヌルハ何ノ用ニカ當ヘキ各宣旨ヲ額ニ當運命ヲ天ニ任テ只一騎ナリトモ國中へ打出テ義兵ヲ擧タランニ勢附ハ臆テ鎌倉ヲ攻落スヘシ勢附スハ只鎌倉ヲ枕ニシテ討死スルヨリ外ノ事ヤアルヘキト義ヲ先トシ勇ヲ宗トシテ宣ヒシカハ當座ノ一族三十餘人皆此議ニソ同シケルサラハ臆テ事ノ漏聞ヘヌ前ニ打立トテ同五月八日卯刻ニ生品明神ノ御前ニテ旗ヲ擧綸旨

ヲ披テ三度はヲ拜シ笠懸野へ打出ラル相隨フ人々氏族ニハ大館次郎宗氏子息孫次郎幸氏二男彌次郎氏明三男彦二郎氏兼堀口三郎貞滿舍弟四郎行義岩松三郎經家里見五郎義胤脇屋次郎義助江田三郎光義桃井次郎尚義是等ヲ宗徒ノ兵トシテ百五十騎ニハ過サリケリ此勢ニテハ如何ト思フ處ニ其日ノ晩景ニ利根河ノ方ヨリ馬物具爽ニ見ヘタリケル兵二千騎許馬煙ヲ立テ馳來ルスハヤ敵ヨト目ヲ懸テ見レハ敵ニハ非スシテ越後國ノ一族ニ里見鳥山田中大井田羽川ノ人々ニテソオハシケル義貞大ニ悅テ馬ヲ控テ宣ケルハ此事兼テヨリ其企ハアリナカラ昨日今日トハ存セサリツルニ俄ニ思ヒ立事ノ候ツル間告申マテナカリシニ何トシテ存セラレケルト問給ヒケレハ大井田遠江守鞍壺ニ畏テ申サレケルハ勅定ニ依テ大義ヲ思召立ル、由承候ハスハ何トシテ加様ニ馳參ルヘク候去ル五日御使トテ天狗山伏一人越後國中ヲ一日ノ間ニ觸廻テ通候シ間夜ヲ日ニ繼テ馳參テ候境ヲ隔タル者ハ明

日ノ程ニソ參着シ候ハンスラン他國へ御出候ハ、暫彼勢ヲ御待候ヘカント申サレテ馬ヨリ下リ各對面色代シテ人馬ノ息ヲ繼セ給ヒケル處ニ後陣ノ越後勢並甲斐信濃源氏トモ家々ノ旗ヲ指連テ其勢五千餘騎夥敷見ヘテ馳來義貞義助斜ナラス悅テ是偏ニ八幡大菩薩ノ擁護ニヨル者ナリ暫モ逗留スヘカラストテ同九日武藏國へ打越給フニ紀五左衛門足利殿ノ御子息千壽王殿ヲ具足シ奉リ二百餘騎ニテ馳着タリ是ヨリ上野下野上總常陸武藏ノ兵共期セサルニ集リ催サ、ルニ馳來リテ其日ノ暮程ニ二十萬七千餘騎兜ヲ並ヘ控ヘタリ増鏡云伯耆の御所へハ人々參りつとふ上達部殿上人數知すさる程に東にも兼て心しけるにや高氏の末の一族なる新田小四郎義貞といふもの今の高氏の子四に成けるを大將軍にして武藏國より軍を起してけり梅松論云五月中旬に上野國より新田左衛門佐義貞君の味方として當

國世良田に打出て陣を取潛に勅を承るによりて義貞一流の氏族みな
打立けり先山名里見堀口大館岩松桃井皆一人當千にあらまといふ者
なしまかる間當國の守護長崎孫四郎左衛門尉即時に馳向て合戦に及
ふといへども既に上野のともから残らま義貞に屬するにこそ相支る
に及はず引退く間義貞多勢を引卒して武藏國に攻入間當國の軍兵も
こと／＼く從附ける

神明鏡云五月五日新田小太郎義貞義助一族卅余人宣旨三度拜之笠懸
野邊打出其勢僅百五十余不過ケリ越後等馳來其日二千余騎ニ成甲斐
信濃源氏五千余騎入幡庄馳付又足利殿若君千壽王殿上野國二百余騎
打出上野上總常陸武藏兵一日内廿餘萬及

後鑑卷之三

尊氏將軍記第一下

起元弘三年五月
九日盡十二月

元弘三年

西癸

五月

九日^{丑辛}北條越後守仲時以下於江州番馬自殺

増鏡云御幸ハ近江國にをはします程に伊吹といふ邊にて何かしの宮
とかや法師にていましけるか先帝の御心よせにてかやうの方もほの
心得侍りけるにや待うけて矢を放ち給ふ又京よりも追手懸るなど聞
へけれハ六波羅の北といひし仲時内春宮兩院具し奉り番馬といふ所
の山の上に入奉りけり手のものども、なを残りてしたがひつきけれ
どもたゝかひもかなはずやありけん終にこの山にて腹切にけり同じ
き南時益といひしハ是までもまいらす守山の邊にて失にけりどを聞
へし云々

梅松論云その夜ハ江州觀音寺を一夜の皇居とす翌日九日東へ心さして落行處に同國番馬の宿の山に先帝の御方と號して近江美濃伊賀伊勢の惡黨とも旗をあけ楯をつきならへて海道を差塞き攻戰ふ七日ハ洛中にをいて合戰をいたし明る八日ハ野伏とも討洩さるゝともから馬疲れて進むことを得ずといへとも名ををしむ兵ともハ戰暮しけるか遁るへき所なかりしかハ恐れなから仙洞を害し奉り各討死自害仕るへきよし一同に申けれハ大將仲時いはく我等命を生て君を敵にうはゝれむころ恥なるへけれ命を捨て後ハ何事かあるへきとて酉時ばかりに自害するあいたしたかふ輩數百人をなしく命を隕す南時益ハ七日の夜四宮河原にて流矢にあたり死去しけるを家の子首をとりて當所に持來りしを北仲時これを一目見て自害せしほとに彼時同じく腹切者の名字共を番場の道場に記し置けれハ世のしる處なり云々太平記云佐々木判官時信今ハスへキヤウ無リケリト愛知河ヨリ引返

シ降人ニ成テ京都へ上リニケリ越後守仲時暫クハ時信ヲ遅シト待給ヒケルカ待期過テ時移リケレハサテハ時信モ早敵ニ成ニケリ今ハ何クヘカ引返シ何クマテカ落ヘキナレハ爽ニ腹ヲ切ンスル物ヲト中々一途ニ心ヲ取定テ氣色涼シクソ見ヘタリケル其時軍勢共ニ向テ宣ケルハ武運漸ク傾テ當家ノ滅亡近キニアルヘシト見給ヒナカラ弓矢ノ名ヲ重シ日來ノ好ミヲ忘スシテ是迄附纏給ヘル志中々申ニ詞ナカルヘシ其報謝ノ思ヒ深シトイヘトモ一家ノ運已ニ盡ヌレハ何ヲ以カ是ヲ報スヘキ今ハ我旁ノ爲ニ自害ヲシテ生前ノ芳恩ヲ死後ニ報セント存スルナリ仲時不肖ナリトイヘトモ平氏一類ノ名ヲ汗セル身ナレハ敵トモ定メテ我首ヲ以テ千戸侯ニモ募リヌラン早ク仲時カ首ヲ取テ源氏ノ手ニ渡シ咎ヲ補テ忠ニ備ヘ給ヘト云ハテサル言ノ下ニ鎧脱テ推シ袒腹カキ切テ伏給フ糟谷三郎宗秋是ヲ見テ涙ノ鎧ノ袖ニカ、リケルヲ押ヘテ宗秋コソ先自害シテ冥途ノ御先ヲモ仕ラント存候ツル

ニ先立セ給ヒヌル事コソ口ヲシケレ今生ニテハ命ヲ際ノ御先途ヲ見
果進セツ冥途ナレハトテ見放シ奉ルヘキニアラス姑ク御待候ヘ死出
ノ山ノ御供申候ハントテ越後守ノ柄口マテ腹ニ撞立テ置レタル刀ヲ
取テ已カ腹ニツキ立仲時ノ膝ニ抱付ウツ伏ニコソ伏タリケル是ヲ始
メトシテ佐々木隱岐前司子息次郎右衛門同三郎兵衛同永壽丸高橋九
郎左衛門同孫四郎同又四郎同彌四郎左衛門同五郎隅田源七左衛門尉
同孫五郎同藤内左衛門尉同餘一同四郎同五郎同孫八同新左衛門尉同
又五郎同藤六同三郎安藤太郎左衛門入道同孫三郎入道同左衛門太郎
同左衛門三郎同十郎同三郎同又次郎同新左衛門同七郎三郎同藤次郎
中布利五郎左衛門石見彦三郎武田下條十郎關屋八郎同十郎黑田新左
衛門同次郎左衛門竹井太郎同掃部左衛門尉寄藤十郎兵衛皆吉左京亮
同勘解由七郎兵衛小屋木七郎鹽屋右馬允同八郎岩切三郎左衛門子息
新左衛門同四郎浦上八郎岡田平六兵衛木工助入道子息助三郎吉井彦

三郎同四郎壹岐孫四郎窪二郎糟谷彌二郎入道同孫三郎入道同六郎同
次郎同伊賀三郎同彦三郎入道同大炊次郎入道同六郎櫛橋次郎左衛門
尉南和五郎同又五郎原宗左近將監入道子息彦七同七郎同七郎次郎同
平右馬三郎御器所七郎怒借屋彦三郎西郡十郎秋月二郎兵衛半田彦三
郎平塚孫四郎每田三郎花房六郎入道宮崎三郎同太郎次郎山本八郎入
道同七郎入道子息彦三郎同小五郎子息彦五郎同孫四郎足立源五參河
孫六廣田五郎左衛門伊佐治部丞同孫八同三郎息男孫四郎片山十郎入
道木村四郎佐々木隱岐判官二階堂伊豫入道石井中務丞子息彌三郎同
四郎海老名四郎同與一弘田八郎覺井三郎石川九郎子息又次郎進藤六
郎同彦四郎備後民部大輔同三郎入道加賀彦太郎同彌太郎三島新三郎
同新太郎武田與三滿王野藤左衛門池守藤内兵衛同左衛門五郎同左衛
門七郎同左衛門太郎同新左衛門齋藤宮内丞子息竹丸同宮内左衛門子
息七郎同三郎筑前民部大輔同七郎左衛門田村中務入道同彦五郎同兵

衛次郎信濃小外記眞上彦三郎子息三郎陶山次郎同小五郎小見山孫太郎同五郎同六郎次郎高境孫三郎鹽谷彌次郎庄左衛門四郎藤田六郎同七郎金子十郎左衛眞壁三郎江馬彦次郎近部七郎能登彦次郎新野四郎佐海八郎三郎藤里八郎愛多義中務丞子息彌次郎是等ヲ宗徒ノ者トシテ都合四百三十二人同時ニ腹ヲソ切タリケル

近江國番場宿蓮華寺過去帳 敬白 陸波羅南北過去帳事 元弘三稔西五月七日依京都合戰破當君兩院關東御下向之間同九日於近江國馬場宿米山麓一向堂前合戰討死自害交名荒々注文事 越後守仲時八十二歲櫻田治部大輔入道淨心七十歲同苅田彦三郎師時三十歲高橋參河守時英十四歲同孫四郎業時三十歲同又四郎範時同五郎盛時二十歲同孫四郎左衛門元時十七歲隅田左衛門尉時親三十歲同孫五郎清親二十歲同藤內左衛門尉八村十四歲同與一眞親十九歲同四郎光親二十歲同五郎重親二十歲同新左衛門尉信近二十歲同孫七國村二十歲同又五郎能近十六歲同藤三國近十七歲同三郎祐近十二歲

五安藤太郎左衛門尉祥兼五十歲子息左衛門太郎則兼九十歲同左衛門三郎則滿三十歲同三郎基兼四十歲中布利五郎左衛門尉綱能四十歲石見彦三郎吉國五十歲武田下條十郎光高二十歲關屋八郎爲好三十歲同十郎爲經黑田新左衛門尉俊保竹井太郎盛充同掃部左衛門尉貞昭齋藤十郎兵衛尉基親勘解由三郎兵衛尉長兼皆吉左京亮旃信三十歲小屋木七郎知秀三十歲加藤七郎斯決十八歲鹽屋右馬允演恒三十歲內海八郎善宣海上八郎教詣岡田平六兵衛尉遠秀岩切三郎左衛門尉有益窪平右衛門入道陵玄二十歲一向堂大庭討死子息新右衛門尉宣高同四郎宣政木工助入道祐善四十歲子息分次郎法眞十八歲吉井彦三郎忠連同四郎忠信壹岐孫七郎貞住窪次郎宣次南方內人々 糟屋彌次郎入道明翁六十歲同彌三郎入道道教六十歲同彦三郎入道倫芳同次郎入道靜誓五十歲同六郎演次同五郎易隆同次郎重俊同三郎能隆同又次郎重安同新左衛門經春同左衛門次郎伴興同七郎三郎伴範同藤三郎家泰大井次郎儔光櫛橋次郎左衛門尉義守南和五郎家守同

又五郎貞徑原宗左近將監入道憐戒二十歲子息彦七定行二十歲同十郎次郎
 俊茂一歲豐島平五重徑同七郎家倍平右馬三郎為住同五郎貞秋土肥三
 郎則實七歲同五郎元實一歲御器所安東七郎經倫七歲平塚彌四郎為稔
 西郡十郎國演怒借屋彦三郎保弘一向堂佛前自害種次二郎兵衛尉
 則光半田彦三郎稔弘華房六郎兵衛入道全幸每田三郎則弘宮崎三郎恒
 則中間平五郎宮崎太郎次郎恒利同上總三郎恒遠山本八郎入道玄桓十三歲
 同十郎入道源德四十歲子息彦三郎繁盛十九歲同小五郎為盛四十歲子息彦
 五郎為泰同孫十郎繁教足立源五長秋同參河又六則利三十歲同彌六則幌
 九二十歲黑田次郎左衛門尉憲滿九歲廣田五郎左衛門尉經英佐々木隱岐前
 司清高三十歲子息次郎右衛門尉泰高十八歲同三郎兵衛尉高秀同永壽丸四十歲
 片山十郎次郎入道祐珪子息彌次郎祥明四十歲伊祐三郎家高二十歲同治
 部丞義高一歲同孫八郎高通三十歲治田八郎良決九歲走井三郎家景十八歲
 中野井次兼尙木村四郎正高二階堂伊勢入道行照四十歲石井中務忠光

子息孫次郎忠泰三十歲同四郎程國海老名四郎忠景二十歲同與三忠元石川
 九郎道幹五十歲子息亦次郎通近二十歲新藤六郎元弘片衣小八郎忠光六歲
 衆備後民部大輔康世四十歲舍弟三郎入道善照四十歲同彦太郎康顯同孫太郎
 康明二十歲武田與次光方四十歲見島介三郎顯氏三十歲同助太郎氏明十八歲眞
 木野藤左衛門尉朝安三十歲池守藤內兵衛尉行直四十歲同左衛門五郎行重
 三三十歲同左衛門七郎行俊二十歲同新右衛門尉顯重三十歲子息左衛門太郎顯
 行十八歲牧野藤左衛門尉忠秋三十歲問注所信濃少輔外記清近二十歲子息阿
 子光丸十四歲同彦太郎良近六歲波羅齋藤宮內丞教親七歲子息阿千丸十六歲
 筑前民部大輔儔弘二十歲同七郎左衛門尉家景二十歲田村中務入道明鑑十六歲
 同彦五郎資信九歲同兵衛次郎親信眞上彦三郎持直子息又三郎信直
 陶山次郎清直備中住人同備中守清房同與次清泰同小四郎敏信同四郎入道
 祥宗同九郎元良同四郎盛宣同三郎敏忠同與三清弘同彦九郎清忠三十歲
 息七郎直清同彦三郎俊景同又四郎敏實同紀七敏直同新藤五入道正通

同又三郎真次同肥後房海範同新三郎祥近同新次郎良房同小五郎真倫
 小宮山孫太郎吉幌四十歲同小三郎師光高見孫三郎逝好十八歲小宮山六郎
 次郎規真同若黨管野源五助光鹽谷彌三郎家弘四十歲莊左衛門四郎俊充藤
 田六郎種法三十歲同七郎賴宣新藤彥四郎能忠金子十郎左衛門尉儔弘十五歲
 二眞壁三郎秀忠三十歲江馬彥次郎常久長崎與三種長近部七郎種次能登
 彥次郎爲祐川越參河入道乘誓六十歲同若黨木戸三郎家保新野四郎朝繁
 三四十歲甘糟三郎左衛門尉清經同七郎知清惣而於當寺討死自害人數肆
 佰三拾人雖然分明交名不知輩者不注之云々
 北條系圖云仲時相摸守基時子越後守元弘三年五月八日於江州番馬自
 害
 松尾系圖云六波羅奉行孫四郎正秀正慶二年五月七日北條仲時時益等
 京都沒落之時於江州番馬一所自害六波羅孫三郎吉忠正慶二年五月
 八日於近江國番馬自害

二階堂系圖云忠貞伊勢守北條仲時同心於江州番馬自害
 秋月系圖云種顯左衛門尉元弘三年江州馬場ニテ自害
 佐々木系圖云清高豐前守宗清子從五位下叙留使左衛門尉元弘二五月
 九日於江州馬場自害關東引付母宗綱女清高子泰高二郎左衛門母信濃
 守三善時康女人同自害二子高秀三郎左衛門同自害三子永壽丸同自害
 又云宗基伊佐源内左衛門尉賴泰子太郎元弘三五月九日清高同自害朝
 綱實綱子孫八元弘三年五月九日自害
 十二日甲辰馳驛書於伯耆使奏六波羅沒落由給
 太平記云都ニハ五月十二日千種頭中將忠顯朝臣足利治部大輔高氏赤
 松入道圓心等追々早馬ヲ立テ六波羅已ニ沒落セシムルノヨシ船上へ
 奏聞ス
 十四日丙午此日長門守護職厚東太郎入道崇西入部
 長門國守護職次第云厚東太郎入道殿法名崇西建武元守護代富永彌六入

道

十五日^{丁未}此日武藏國分倍河原合戰鎌倉勢大敗
増鏡云此頃の東の將軍ハ守邦親王にてはします御後見つかふまつ
る高時入道貞顯入道城介入道圓明長崎入道圓喜などいふ者とも驚き
騒て高時入道弟に四郎左近太夫泰家といひし今ハ入道したるを大
將に下しける五月十四日鎌倉を立てむかふその勢十萬餘騎高時入道
の一族つきしたかふものうこらみなひろこりて鎌倉はしまりし頼朝
の世時政より今にいたるまで多くの年月をつめりわつかなる新田な
といふ國人に容易いかてかハ亡さるへきをほへしに程なく十五日
敵既に鎌倉に近づく由聞へて家々をこほち騒きのゝしる世の既に滅
するにやと覺しとそ人ハかたり侍りし四郎左近太夫入道軍に打負ら
るゝにやしたかふ武士どものこりなく新田か方へつきぬれハ得さら
ぬものともはかり五六百騎にて十六日の夜に入て鎌倉へ引あくる僅

に中一日にてかくなりぬる事夢かどそをほへし云々
梅松論云五月十四日高時の弟左近太夫將監入道慧性を大將とし武藏
へ發向す同日山口の庄の山野に陣をとりて翌日十五日分配關戸河原
にて終日戦ひけるに命を隕し創を被るもの幾千萬といふ數をしらす
中にも親衛禪門の宗徒の者とも安保左衛門入道道潭粟田横溝八郎最
前に討死をしける間鎌倉勢ことく引退く所に即大勢攻上る間鎌
倉中のさひき只今敵の亂れ入たらんもかくやとを覺しかゝりしほど
に三の道へ討手ををつかはされける下の道の大將ハ武藏守貞將向ふ
所に下總より千葉貞胤義貞に同心の義ありて攻上る間武藏の鶴見
の邊に於て相戦ひけるかこれ打負て引退く云々
神明鏡云鎌倉ヨリハ金澤武藏守貞將ニ五萬餘騎ヲ差副テ下河邊へ下
サル一方ハ櫻田治部大輔兼光大將ニテ長崎次郎高重已下武藏上野勢
六萬余騎ハ上道ヨリ入間河へ向ラル同十一日辰刻ニ武藏國小手差原

ニ打菘源氏ノ陣ヲ見渡セハ其勢雲霞ノ如兩陣相近成テ互時ヲ動ト作
ル矢合鏑ヲ射違程コソアレ源平大勢入亂散々合戰打ッ打レツ手負死
人不知其數其日源氏ハ引退入間河ニ陣ヲ取平家モ又引退久米河ニ陣
ヲ取兩陣其間僅廿里ナリ其夜ヲ待明シ平家ニ先ヲセラレシト源氏久
米河陣ニ押寄平家モ定寄スラント待掛タル事ナレハ六萬余騎ヲ一手
ニ成テ戰ケルカ平家打負テ分陪ヲ差テ引退御方打負ヌル由鎌倉へ聞
エケレハ相摸入道ノ舍弟四郎左近大夫入道惠性ヲ大將トシテ重廿萬
騎差下サル其勢十四日ノ夜半計ニ分陪ニ着ケレハ平家勢力ヲ得テ進
源氏ハ平家ニ荒手加タル事ヲハ不知十五日ノ夜未明分陪押寄テ時ヲ
作平家荒手大勢ト一ツニ成テ源氏ヲ中ニ取籠テ不餘責ケレ共電光ノ
ヒラメカスル如ニ戰ケリ去レ共其日打負テ源氏ハ堀兼ヲ差テ引退爰
三浦大多和平六左衛門尉義勝相摸勢相具テ十五日ノ夜ニ入テ源氏ノ
陣ニ馳來義貞不斜喜テ軍談合有テ義勝ニ被任去程ニ義勝三浦四萬余

騎最前ニ進テ五月十六日寅刻分陪川原へ押寄ル態ト旗手ヲモ下サス
時ノ聲ヲモ不揚平家ノ勢ヲ出拔ンカ爲也平家ハ數日ノ合戰人馬モ疲
タル上今敵可寄共不思寄ケルニヤ馬ニ鞍ヲモ不置物具モセス或酒ニ
醉臥ルモアリ或遊君ト双枕モアリ懸ケル處へ大多和大勢ニテ馬ヲ閑
々ト打近ケレハ少々騒立者モ有ケルヲ去事ヨリ三浦ノ大多和相摸勢
率シテ御方ニ參由聞ヘシ眊シトテサ、メキケル處源氏三方ヨリ関聲
ヲ動ト作テ平家ノ陣へ切テ入共関聲ニ周章迷テ馬ヨ物具ヨト遽アヘ
ル處へ義貞大手ヨリ切入大多和ヲ始トシテ大勢ハ搦手ヨリ切テ入散
々ニ責ケル間平家一戰ニ破ラレテ大將四郎左近大夫入道殿ヲ始トシ
テ皆鎌倉へソ落上リケル云々

十八日庚戌此日鎌倉洲崎合戰赤橋相摸守守時自殺此高氏主岳父也
太平記云赤橋相摸守今朝ハ洲崎へ向ハレタリケルカ此陣ノ軍強クシ
テ一日一夜ノ其間ニ六十五度マテ切合タリサレハ數萬騎有ツル郎從

モ討レ落失ル程ニ僅ニ殘ル其勢ハ三百余騎ニソ成ニケル侍大將ニテ
同陣ニ候ケル南條左衛門高直ニ向テ宣ヒケルハ漢楚八箇年ノ戰ニ高
祖度コトニ討負給ヒシカトモ一度烏江ノ軍ニ利ヲ得テ却テ項羽ヲ亡
サレキ齊晉七十度ノ戰ニ重耳更ニ勝事ナカリシカトモ遂ニ齊境ノ戰
ニ打勝テ文公國ヲ保テリサレハ萬死ヲ出テ一生ヲ得百度負テ一戰ニ
利アルハ合戰ノ習ナリ今此戰ニ敵聊勝ニ乘ニ似タリトイヘトモサレ
ハトテ當家ノ運今日ニ窮リヌトハ覺ス然トイヘトモ盛時ニ於テハ一
門ノ安否ヲ見果ルマテモナク此陣頭ニテ腹ヲ切ント思フナリ其故ハ
盛時足利殿ニ女性方ノ縁ニ成ヌル間相摸殿ヲ始メ奉リ一家ノ人々モ
サコソ心ヲモ置給フラメ是勇士ノ恥ル所ナリ彼田光先生ハ燕丹ニ語
ハレシ時此事漏スナト云レテ其疑ヲ散センタメ命ヲ失テ燕丹カ前ニ
死タリシソカシ此陣戰ヒ急ニシテ兵皆疲レタリ我何ノ面目カ有テ固
メタル陣ヲ引テ而モ嫌疑ノ中ニ暫ク命ヲ惜ヘキトテ戰イマタ半ナル

最中ニ帷幕ノ中ニ物具脱捨腹十文字ニ切給ヒテ北枕ニソ伏給フ
北條系圖云守時武藏守久時子相摸守於洲崎自害元弘三年五月日慈光
院法名道本

廿二日寅此日鎌倉滅亡北條相摸守高時入道宗鑑以下悉自殺

太平記云長崎次郎高重ハ始メ武藏野ノ合戰ヨリ今日ニ至ルマテ夜晝
八十餘箇度ノ戰ニ每度先ヲ懸圍ヲ破リテ自相當ル事其數ヲ知ラス然
ハ手ノ者若黨共次第ニ討亡サレテ今ハ僅百五十騎ニ成ニケリ五月二
十二日ニ源氏早谷々へ亂入テ當家ノ諸大將大畧皆討レ給ヒヌト聞ヘ
ケレハ誰固メタル陣トモ云ス只敵ノ近ツク處へ馳合々々八方ノ敵ヲ
拂テ四隊ノ固ヲ破リケル間馬疲レヌレハ騎替太刀打折レハ佩易テ自
敵ヲ斬テ落ス事三十二人陣ヲ破ル事八箇度ナリ角テ相摸入道ノオハ
シマス葛西谷へ歸リ參テ中門ニ畏リ涙ヲ流シ申ケルハ高重數代奉公
ノ義ヲ忝シテ朝夕恩顔ヲ拜シ奉リツル御名殘今生ニ於テハ今日ヲ限

トコソ覺候へ高重一人數箇處ノ敵ヲ打散シテ數度ノ戰ニ毎度打勝候
トイへ共方々ノ口々皆攻破ラレテ敵ノ兵鎌倉中ニ充滿シテ候ヌル上
ハ今ハヤタケニ思フ共叶フヘカラス候只一スシニ敵ノ手ニ懸ラセ給
ハヌ様ニ思召定サセ給ヒ候へ但高重歸參テ勸メ申サン程ハ左右ナク
御自害候ナ上ノ御存命ノ間ニ今一度快ク敵ノ中へ懸入思フ程ノ合戰
シテ冥途ノ御供申サン時ノ物語ニ仕候ハントテ又東勝寺ヲ打出レハ
其後影ヲ相摸入道遙ニ見送給ヒテ是ヤ限ナルラント名殘惜ケナル體
ニテ涙クミテソ立レタル略中サル程ニ高重走廻テ早々御自害候へ高重
先ヲ仕テ手本ニ見セ進ラセ候ハント云儘ニ胴計殘タル鎧脱テ拋棄御
前ニアリケル盃ヲ以テ舍弟ノ新右衛門ニ酌ヲ取セ三度傾テ攝津刑部
大輔入道道準カ前ニ置思サシ申ソ是ヲ肴ニシ給ヘトテ左ノ小脇ニ刀
ヲ撞タテ右ノ傍腹迄切目長ク搔破リ内ナル腸繰出シテ道準カ前ニソ
伏タリケル略中長崎新右衛門今年十五ニ成ケルカ祖父ノ前ニ畏テ父祖

ノ名ヲ顯スヲ以子孫ノ孝行トスルコニテ候ナレハ佛神三寶モ定テ御
免コソ候ハンスラントテ年老殘リタル祖父ノ圓喜カ肱ノカ、リチニ
刀刺テ其刀ニテ已カ腹ヲカキ切テ祖父ヲ取テ引伏テ其上ニ重テソ伏
タリケル此小冠者ニ義ヲ進メラレテ相摸入道モ腹切給へハ城入道續
テ腹ヲソ切タリケル是ヲ見堂上ニ坐ヲ列タル一門他家ノ人々雪ノ如
クナル膚ヲ推袒キ推袒キ腹ヲ切人モアリ自頭ヲカキ落ス人モアリ思
々ノ最期ノ體殊ニ由々敷ソ見ヘタリシ略中梅松論云五月十八日の未刻はかりに義貞の勢ハ稻村崎を経て前濱の
在家を焼拂ふ烟みへければ鎌倉中のさはき手足を置所なくあへてふ
ためきける有様たどへていはんかたうなき高時の家人諏訪長崎以下
の輩身命を捨てふせき戰ける程に當日の濱の手の大將大館稻瀬川に
れいて討取其手引退て靈山の頂に陣を取同十八日より廿二日に至る
まで山内小袋坂極樂寺の切通以下鎌倉中の口々合戰のときのこへ矢

さけひ人馬の足音暫も止時なしさしも人の散なつき富貴榮花なりし
 事をそらくへ上代にも有かたく見へしかども樂つきて悲來る習ひ遁
 かたくして相摸守高時禪門元弘三年五月廿二日葛西谷にいて自害
 しける事悲むへくも餘あり一類も同數百人自害するこそあはれなれ
 爰にふじきなりしへ稻村崎の浪打際石高く道細くして軍勢の通路難
 義の所に俄に鹽干て合戦の間干瀉にて有し事かたく佛神の加護と
 そ人申ける然るに鎌倉へ南の方へ海にて三方ハ山なり嶺つゝきに寄
 手の大勢陣を取て禁にをり下り處々の在家に火を放ちしにいつかた
 の風もみな鎌倉に吹入て殘る所なくこそ焼はらはれける天命に背く
 道理明かなり治承に右幕下草創より以來天にせくゝまり地にぬき足
 して上を尊ひ下を惠み政道の法度騎射の日記を定置て國を治めしか
 へ狼煙たつ事なく家々戸さしを忘れて樂榮て久しかりしに時刻到來
 にや元弘三年の夏時政の子孫七百餘人同時に滅亡すといへども定置

ける條々へ今に残り天下を治め弓箭の道をたへす法と成けるこそ目
 出度けれ
 廿常樂記云五月廿二日關東没落御一族大畧滅亡三十一入道崇鑑惠誓已下
 北條系圖云高時相摸守貞宗子嘉元元年癸卯誕生童名成壽丸相摸守法
 名宗鑑元弘三年五月廿二日於葛西谷東勝寺自害四十二號法界寶戒寺子邦
 時童名萬壽丸相摸太郎高時滅亡時於鎌倉被誅十五歲
 貞直大佛民部少輔宗泰子右馬助陸奥守續後及千載作者高時滅亡時於
 鎌倉討死
 國時鹽田武藏守義政子鹽田陸奥守法名教覺又道淨高時滅亡時自害
 子俊時民部大輔中務高時滅亡時自害
 基時尾張守時兼子相摸守號普恩寺歌人法名鑿念亦信忍於普恩寺高時滅亡時自害
 茂時武藏守瀨時子右馬頭元德二年加判事被仰下元弘三年五月廿五日
 於殿中自害

後醍醐天皇御紀

尊氏記

貞顯越後守顯時子修理大夫号金澤法名崇顯高時同自害

子貞將越後守武藏守高時滅亡時討死

貞將子忠時左近將監父同自害

貞顯弟顯實甘繩伊豫守高時駿河守滅亡時自害

子時顯左近將監同父自害

有助八郎兼義子若宮別當号佐々目僧正東寺一長者元弘三五月廿三日

大亂時高時一所自害五十七

範貞備前守時範子駿河守續後作者高時同自害

南部系圖云彦六郎祐政子茂時右馬頭正慶二年五月二十二日與平高時

於東勝寺自裁法諱正阿彌陀佛安牌藤澤清淨光寺

廿三日卯先皇從伯耆使返鑾輿給

太平記云廿三日伯耆船上ヲ御立有テ腰輿ヲ山陰ノ東ニソ催サレケル

路次ノ行粧例ニ替テ頭大夫行房勘解由次官光守二人計コソ衣冠ニテ

供奉セラレケル其外ノ月卿雲客衛府諸司ノ助ハ皆戎衣ニテ前騎後乘

ス六軍悉甲冑ヲ着シ弓箭ヲ帶シテ前後三十餘里ニ支ヘタリ

伯耆卷云五月十二日京都より千種頭中將忠顯朝臣足利治部大輔高氏

赤松入道圓心村上判官高重同信濃法眼源盛村上小次郎行村か許より

追々早馬を立て五月七日六波羅没落の由船上山へ奏す其早馬同十日

に到來して同十八日伯耆の船上山を御立ある伯耆守長年ハ帶劔の役

嫡子義高を初として一族前後左右を守護云々

廿四日丙辰就伊勢國凶徒對治賜御書於吉見――

集古文書載

伊勢國凶徒對治事々書一通進之候守此旨可令致沙汰給候恐々謹言

元弘三年五月廿四日

前治部大輔高氏

謹上 吉見殿

伊勢國可令對治凶徒由事今月廿四日御教書案文遣之守御事書之旨

後醍醐天皇御紀

元弘三年

三十二

可致其沙汰來月三日以前小河可令馳參給候於緩怠之儀者關東同心之由可令注申也仍執達如件

元弘三年五月三十日

三重郡地頭御家人中

廿七日^巳須留田式部大夫入道心可捧書申可抽軍忠之由

古證文載

土佐國須留田式部大夫入道心可令馳參上候奉付于當御手可致軍忠候以此旨可有御披露候恐惶謹言

元弘三年五月廿七日

沙彌心可

進上御奉行所

承了御判

此頃於鎌倉千壽王令居二階堂別當坊諸將群參

梅松論云關東誅伐の事ハ義貞朝臣其功をなす所にいか、有けむ義詮

六の御所四歳の御時大將として御こしに召れて義貞と御同道にて關東御退治以後は二階堂の別當坊に御座有しに諸將悉く四歳の若君に屬し奉りしこそめてたけれ是實に將軍にて永々萬年御座有へき瑞相とる人申ける爰に京都より細川阿波守舍弟源藏人掃部介兄弟三人關東追討の爲に差下さるゝ所に路次にをいて關東ハ滅亡のよし聞へ有けれども猶々下向せらるかくて若君を補佐し奉るといへども鎌倉中連日空騒して世上穩かならざる間和氏賴春師氏兄弟三人義貞の宿所に向て事の子細を問尋て勝負を決せんとせられけるに依て義貞野心を存せざるよし起請文を以陳し申されし間せいひつす其後一族悉く上洛有ける

是月土佐國中山左衛門太郎宗行捧着到狀

古證文載

土佐國下津中山公文左衛門太郎宗行申爲合戰之忠節令馳參

元弘三年五月日

御奉行所

六月小

四日丙寅給書於長宗我部信能是依走湯山密嚴院領事也

蠹簡集載

土佐國介良庄事爲走湯山密嚴院領之處甲乙人致濫妨狼籍條早甲斐孫四郎入道と相共相鎮狼籍沙汰居代官可令所務且載起請文之詞可注進違犯仁交名之狀如件

元弘三年六月四日

源朝臣御判尊

長宗我部新左衛門殿

六日辰戌還幸二條內裡 此日高氏朝臣任治部卿爲鎮守府將軍被聽內昇殿

直義朝臣任左馬頭

太平記云六月六日東寺ヨリ二條ノ内裏へ還幸成テ其日先臨時ノ宣下有テ足利治部大輔高氏治部卿ニ任ス舍弟兵部大輔直義左馬頭ニ任スサル程ニ千種頭中將忠顯朝臣帶劔ノ役ニテ鳳輦ノ前ニ供奉セラレケルカ尙非常ヲ慎シム最中ナレハトテ帶刀ノ兵五百人二行ニ歩セラレ高氏直義二人ハ後乗ニ從テ百官ノ後ニ打ル衛府ノ官ナレハトテ騎馬ノ兵五千餘騎甲冑ヲ帶シテ打ル

十二日甲戌將軍叙從四位下任左兵衛督

公卿補任云源尊氏元弘三十六十二叙從四位下越階去五日同日任左兵衛督

此頃左武衛使誅護良親王候人殿法印良忠家人

太平記云去年五月ニ官軍六波羅ヲ攻落シタリシ刻殿法印ノ手ノ者トモ京中ノ土藏共ヲ打破テ財寶共ヲ運取ケル間狼籍ヲ鎮シカ爲足利殿

ノ方ヨリ是ヲ召捕テ二十余人六條河原ニ切テソ懸ラレケル其高札ニ
大塔宮ノ候人殿法印良忠カ手ノ者共在々所々ニ於テ晝強盜ヲ致ス間
誅スル所ナリトソ書レタリケル殿法印此事ヲ聞テ安カラサル事ニ思
ハレケレハ様々ノ讒訴申サレケル

十七日己卯祝彦三郎安親捧軍功申文

集古文書載

伊豫國在廳兼御家人祝彦三郎安親申軍忠之間事去閏二月十一日當
國石井濱合戰時出山手安親懸先畢次自同廿七日至于三月十一日喜
多郡根來之城合戰同十二日星岡之合戰抽每度軍忠候了次月五月七
日讚岐國鳥坂山之合戰相伴雅樂三郎入道周敷淨圓坊手安親懸先候
畢凡於道前方者安親自最初令馳參御方數箇所合戰抽忠勤候之條悉
御見知候上者早可預御一見之狀候以此旨可有御披露候哉恐惶謹言
元弘三年六月十七日 安親

御奉行所

承了判

廿一日癸未狩野彦五郎賴廣捧着到狀

狩野文書載

加賀國福田庄菅浪郷總領地頭兼菅生社神主狩野彦五郎賴廣爲致軍
忠馳參今月二十一日仍以此旨可有御披露候恐惶謹言

元弘三年六月廿五日 藤原賴廣 承了

進上

在判

廿四日乙卯此日佐々木七郎左衛門義宗卒

佐々木系圖云義宗佐世七郎左衛門清信子孫七郎左衛門元弘三年七月
二十四日於京都死去

八月大

五日丙寅左武衛叙從三位兼武藏守給御諱改爲尊氏

公卿補任云源尊氏八月五日叙從三位元左兵衛督從四位下今日以高字

爲尊同日兼武藏守八月五日兼武藏守今日以高爲尊
官位記云八月五日叙從三位越階同日兼武藏守今日以高爲尊

九日庚午被禁海道驛程狼籍事
伊豆國三島社文書載

禁制海道路次并宿々狼籍事問力
或号早馬御持或稱方々使者奪取旅人并在地人牛馬於宿々宛課雜事
寄事於左右致種々狼籍之分有之關所詮雖号早馬不帶過書者不可許
容若不拘制法者可召捕其身之狀如件

元弘三年八月九日 尊氏御判

九月小

十月大

二日壬戌美作國人甬田正秀捧着到狀

諸家文書纂載

美作國御家人甬田彌平入道正秀爲軍忠雖令在鎌倉候去九月廿一日
馳參候以此旨可有御披露候恐惶謹言

元弘三年十月二日 沙彌正秀

進上 御奉行所

承了御判尊氏

三日癸亥大友式部小輔氏泰卒

大友系圖云氏泰正慶二年十月三日逝去同慈寺殿法名獨峯清巍

十一月大

廿日庚戌豐前藏人次郎入道寂性捧着到狀

志賀文書載

豐後國豐前藏人次郎入道寂性以今月十日令參洛候以此旨可有御披
露候恐惶謹言

元弘三年十一月廿日

沙彌寂性上

進上 御奉行所

十二月小

廿八日子戌上野大守成良親王爲鎮東將軍左馬頭直義朝臣爲其執權東國下向

梅松論云關東へハ同年の冬成良親王征夷將軍として御下向なり下御所左馬頭殿供奉し奉られしかハ東八か國のともから大畧屬し奉りて下向を鎌倉へ春夏の亂に地拂しかとも大守御座ありければ庶民安堵の思ひをなしけり

天正本太平記云建武元年改元ノ驗シニヤ凶器悉ク退散シテ寢宇無爲ニ成ニケリサレトモ前代ノ餘殃尙東國ニアリ北關ノ煩ナルヘシトテ當今第八宮ヲ征夷將軍ニ成シ奉リ鎌倉ニ居進ラセラレ左馬頭直義其執權ニオハシケル
神皇正統記云同十二月左馬頭源直義朝臣相摸守を兼して下向すこれ

も四品上野の太守成良親王をともなひ奉るこの親王のちにまはらく征夷大將軍を兼させたまふ直義ハ高氏か弟なり

是年因立后左武衛被詠月次屏風歌

新千載集云元弘三年立后月次屏風に春日まつりの儀式ある所を諸人もけふみ分て春日野や道ある御代に神祭るなり

尊氏將軍記第二起建武元年正月
正月小
二日卯此日保田權頭宗重卒
保田系圖云宗重太郎忠宗子傳聞文永年中禁裡回祿事急宗重率士卒到
禁中速救之時叙三位任中將賜十六葉唐菊御紋是因回祿之忠功也建武
元年正月二日卒歲九十五法名宗傳
五日甲左武衛叙正三位給
公卿補任云源尊氏正月五日叙正三位
廿九日戊改元建武於馬場殿御弓場始興行
皇年代畧記云甲戌正月廿九日改元撥亂歸正云云
大的日記云公家一統之御時於馬場殿御的有之候射手皆御再興其中細
川侍中依三五度高名被懸御衣云云一番仁木伊賀守賴細川源藏人春二

後鑑卷之四

尊氏將軍記第二起建武元年正月

正月小

二日卯此日保田權頭宗重卒

保田系圖云宗重太郎忠宗子傳聞文永年中禁裡回祿事急宗重率士卒到
禁中速救之時叙三位任中將賜十六葉唐菊御紋是因回祿之忠功也建武
元年正月二日卒歲九十五法名宗傳

五日甲左武衛叙正三位給

公卿補任云源尊氏正月五日叙正三位

廿九日戊改元建武於馬場殿御弓場始興行

皇年代畧記云甲戌正月廿九日改元撥亂歸正云云

大的日記云公家一統之御時於馬場殿御的有之候射手皆御再興其中細

川侍中依三五度高名被懸御衣云云一番仁木伊賀守賴細川源藏人春二

番大高伊豫權守成重本間孫四郎季忠三番星野左近藏人千秋左近藏人範高四

番高豐前守澁谷四郎左衛門尉棟重五番武田駿河守小笠原信濃守宗貞

二月六日

六日甲子被令武藏國飯塚村法華寺領事于上杉伊豆守重能

武州文書載

武藏國飯塚村法華寺住持是徹申寺領事被下 綸旨之處大河原又三

郎致濫妨云云早可被沙汰付于是徹之狀如件

建武元年二月六日 尊氏御判

伊豆守殿

三月小

五日癸巳於關東本間澁谷一族蜂起澁川刑部大輔義季討平之

梅松論云三月上旬關東に本間と澁谷か一族先代方とし謀反を興し相

摸國より鎌倉へ寄來間澁川刑部大輔義季を大將として極樂寺の前に

馳向て責戰事數刻有しに凶徒打負ぬ

廿一日己酉此日長島入道以下於阿彌陀峯被誅

近江國番場宿蓮華寺過去帳載 建武元年三月廿一日夜半阿彌陀峯被

誅人々注狀 長島四郎左衛門入道佐助五郎上九郎入道儀我小五郎

歌

都にて聞たに遠き故郷をなを隔行たひの空かな

上總入郎入道陸奥國修理亮入道儀我四郎

浮へきわか身さへまで山川のふかさ淺もさためなき世に

佐助秋野五郎ヨメル

都にて散花よりもあたる今年の春の命なりけり

上野式部大夫島兵庫助佐助式部大夫同右馬助陸奥國佐助入道

故郷に歸らぬ鴈の残おてはかなき花とともちるかな

作者糟屋十郎 次六條川原被誅人々同年十二月四日夜半ニ公藤次郎

同次郎右衛門尉五十同十二月卅日出羽入道六十子息一人孫三人彼是五人同所被誅訖

梅松論云去年召置れし金剛山の討手の大將阿曾霜臺陸奥右馬介長崎四郎左衛門尉邊土において誅せらる是ハ本間澁谷か謀反に依てあり其後もなを京中騒動して止時なし

太平記云平氏ノ軍兵已ニ十方ニ退散ストイヘトモ殘留ル兵尙五萬騎ニ餘リタレハ今一度手痛キ合戦アラント覺ルニ日來ノ儀勢盡ハテ、イッシカ小水ノ魚ノ沫ニ息ツク體ニ成テ徒ニ日ヲ送ケル間先一番ニ南都ノ一ノ木戸口般若寺ヲ固テ居タリケル宇都宮公紀清兩黨七百餘騎綸旨ヲ賜リテ上洛ス是ヲ始トシテ百騎二百騎五騎十騎我先ニト降參シケル間今ハ平氏一族ノ輩普代重恩ノ族ノ外ハ一人モ殘留ルモノモ無リケリ是ニ附テモ今ハ何ニ憑テ懸テカ命ヲ惜ムヘキナレハ各討死シテ名ヲ後代ニコソ殘スヘカリケルニセメテノ業ノ程ノ淺マシサ

ハ阿曾彈正少弼時治大佛右馬助貞直江馬遠江守佐介安藝守ヲ始トシテ宗徒ノ平氏十三人並長崎四郎左衛門尉二階堂出羽入道道蘊已下關東權勢ノ侍五十余人般若寺ニシテ各入道出家シテ律僧ノ形ニ成リ三衣ヲ肩ニ懸一鉢ヲ手ニ提テ降人ニ成テソ出タリケル定平朝臣是ヲ請取テ高手小手ニイマシメ傳馬ノ鞍坪ニ縛屈メテ數萬ノ官軍ノ前々ヲ追立サセ白晝ニ京ヘソ歸ラレケル中七月九日阿曾彈正少弼大佛右馬助江馬遠江守佐介安藝守並長崎四郎左衛門尉是十五人阿彌陀峯ニテ誅セラレケリ中二階堂出羽入道道蘊ハ朝敵ノ最一武家ノ輔佐タリシカトモ賢才ノ譽兼テヨリ叡聞ニ達セシカハ召仕ルヘシトテ死罪一等ヲ赦サレ懸命ノ地ニ安堵シテ居タリケルカ又隱謀ノ企有トテ同年ノ秋ノ季ニ終ニ死刑ニ行ハレテケリ佐介左京亮貞俊ハ平氏ノ門葉タル上武畧才能トモニ兼タリシカハ定テ一方ノ大將ヲモト身ヲ高ク思ヒケル處ニ相摸入道サマテノ賞翫モ無リケレハ恨ヲ含ミ憤ヲ抱キナカ

ラ金剛山ノ寄手ノ中ニソ在ケル斯ル處ニ千種頭中將綸旨ヲ申與ヘテ
 御方ニ參ヘキ由ヲ仰ラレケレハ去五月ノ初ニ千劍破ヨリ降參シテ京
 都ニソ經廻ケル去程ニ平氏ノ一族皆出家シテ囚人ニ成シ後ハ武家被
 官ノ者共悉所領ヲ召上ラレ宿所ヲ追出サレテ僅ナル身一ツヲタニ措
 カ子テ貞俊モ阿波國ヘ流サレテ有シカハ關東奉公ノ者共ハ一旦命ヲ
 助カラシ爲ニ降人ニ出ト云トモ遂ニハ如何ニモ野心有ヌヘケレハ悉
 誅セラルヘシトテ貞俊又召捕レテケリ中貞俊喜ヒテ敷皮ノ上ニ居直
 リテ一首ノ歌ヲ詠シ十念高ラカニ唱テ閑ニ首ヲソ打セケル大將深
 四月大小...
 廿日丁丑以播磨國賀古庄給赤松圓心一族...
 赤松則房雜談聞書載...
 播磨國賀古庄以下所々事...
 爲勳功之賞令配分一族中之由綸旨如此案文此内佐土郷赤松律師則

祐可令知行之狀如件

建武元年卯月廿日

御判

圓心沙彌在

五月小

六月大

七月小

十六日壬寅將軍家御息逝

常樂記云七月十六日足利殿御子息他界

廿日丙午御笙始

官位記云建武元年七月廿日御笙始

八月大

九月大

十二日丁酉被觸鎮西警固及日薩兩國守護事於島津入道許

島津文書載

鎮西警固并日向薩摩兩國事任給旨可被致其沙汰之狀如件

建武元年九月十二日 御判

島津上總入道殿

十四日己亥左武衛任參議給

公卿補任云源尊氏十四日任參議

官位記云九月十四日任參議左兵衛督武藏守如元

十月小

廿二日丁丑征夷將軍護良親王被召捕馬場殿依左武衛告訴也

太平記云加様ノ事トモ重疊シテ上聞ニ達シケレハ宮モ憤リ思召テ志貴ニ御坐有シ時ヨリ高氏卿ヲ討ハヤト連々ニ思召立ケレ共勅許無リシカハ力ナク黙止給ヒケルカ尙讒口止サリケルニヤ内々隱密ノ儀ヲ以テ諸國へ令旨ヲ成サレ兵ヲ召レケル高氏卿此事ヲ聞テ内々繼母

ノ准后ニ屬シ奉リ奏聞セラレケルハ兵部卿親王帝位ヲ奪奉ラン爲ニ諸國ノ兵ヲ召候ナリ其證據分明ニ候トテ國々へ成下サル處ノ令旨ヲ取テ上覽ニ備ラレケリ君大ニ逆鱗有テ此宮ヲ流罪ニ處スヘシトテ中殿ノ御會ニ事ヲ寄兵部卿親王ヲ召サレケル宮懸ル事トハ更ニ思召寄ラス前驅二人侍十餘人召具シテ忍ヤカニ御參内有ケルヲ結城判官伯耆守二人兼テヨリ勅ヲ承テ用意シタリケレハ鈴ノ間ノ邊ニ待受是ヲ捕奉ル則馬場殿ニ押籠奉ル宮ハ一間ナル所ノ蜘蛛手結タル中ニ參通フ人一人モ無シテ涙ノ床ニ起臥セ給フニモコハ如何ナル我身ナレハ元弘ノ始ハ武家ノタメニ身ヲ隱シ木ノ下岩ノハサマニ露敷袖ヲホシカ子歸洛ノ今ハ一生ノ樂イマタ一日モ終サルニ讒臣ノ爲ニ罪セラレ刑戮ノ中ニハ苦ムラント知ヌ前世之報マテモ思召殘ス方モナシ梅松論云建武元年六月七日兵部卿親王大將として將軍の御所に押寄らるへき風聞しける程に武將の御勢御所の四面を警固し奉り余の軍

勢ハ二條大路に充滿しける程に事の躰大義に及によつて當日無爲に
 なりけれども將軍よりいきとをり申されければ全く多いりよに
 らず護良親王の張行の趣なりしほどに十月廿二日の夜親王御參内の
 次を以武者所に召籠奉て翌朝に常盤井殿へ遷し奉り武家の輩警固し
 奉る宮の御内の輩をハ武者の番衆兼日勅命を蒙りて南部工藤を初と
 して數十人召預けられける
 保曆間記云高氏昇殿官途ハ成タリケレトモサセル恩賞モナシ其故ハ
 大塔宮還俗オハシマシテ宮將軍ト申ケルカサ、ヘ申サセ給ヒケリ高
 氏兵權ヲ取テハ昔ノ頼朝ニ替ヘカラス此次ニ誅罰セラルヘシト申サ
 レケルヲ帝サシモノ軍忠ノ仁ナリトテ其儀ナシ彼宮種々ノ謀ヲ廻シ
 テ高氏ヲ討ントス其比幾内西國ノ武士楠ナント申者ハ皆彼宮ノ御方
 ナリケレハ便宜アラハ高氏ヲ討ントセラレケレトモ東國ノ武士多ハ
 高氏方ナリケル上ニ普代ノ武勇ナレハ輒モ討レス將軍ニサヘ成サル

ヘシト聞ユ云々

廿三日 戊寅 東寺塔塔供養

東寺王代記云建武元年九月廿三日東寺塔婆供養主上臨幸兩日共万、
 也

是秋依軍功賞左武衛爲武藏下總常陸守護直義朝臣爲遠江守護

太平記云諸軍勢ノ恩賞ハ姑ク延引ストモ先大功ノ輩ノ抽賞ヲ行ハル

ヘシトテ足利治部大輔高氏ニ武藏常陸下總三箇國舍弟左馬頭直義ニ

遠江國云々

十一月大

十五日 己亥 細川陸奥守顯氏護送護良親王此日發向鎌倉

梅松論云同十一月親王をハ細川陸奥守顯氏請取奉リテ關東へ御下向
 あり思ひの外なる御旅の空申もかか／＼愚也宮の御謀叛眞實は多
 りよにてありしか共御料を宮にゆつり給ひしかは鎌倉へ御下向とそ

聞へし宮ハ二階堂の藥師堂の谷に御座ありけるか武家よりも君のう
らめしくわたらせ給ふと御獨こと有けると承る
太平記云遂ニ五月三日宮ヲ直義朝臣ノ方へ渡サレケレハ數百騎ノ軍
勢ヲ以テ路次ヲ警固シ鎌倉へ下シ奉リテ二階堂ノ谷ニ土ノ牢ヲ塗テ
ソ置進ラセケル南ノ御方ト申ケル上藤女房一人ヨリ外ハ著副進ラス
ル人モナク月日ノ光モ見ヘヌ闇室ノ内ニ向テヨコキル雨ニ御袖ヲ濡
シ岩ノ滴ニ御枕ヲホシワヒテ年ノ半ヲ過シ給ヒケル御心ノ内コソ悲
シケレ

十六日庚子左典厩被命武藏金澤稱名寺住持職

金澤稱名寺文書載

當寺住持職事如元不可有相違之狀如件

建武元年十一月十六日

左馬頭判

金澤稱名寺長老

十九日癸卯左武衛參議拜賀

西三條裝束抄云建武元年十一月十九日等持院將軍參議拜賀ノ時蒔繪

螺鈿ノ劔帶セラル又曰等持院將軍參議拜賀ニ有文巡方ヲ用ラル

廿四日戊申左典厩命山内新阿彌陀堂供僧職事於三位律師實修

相州文書載

判直義

山内新阿彌陀堂供僧職壹口大堀事

右三位律師實修不可有相違之狀如件

建武元年十一月廿四日

十二月大

廿六日庚辰左典厩依法華堂禪教職事傳書大夫阿闍梨及刑部僧都

相州文書載

右大將家法華堂禪教職事如元不可有相違之狀如件

建武元年十二月廿六日成親王左馬頭判

大夫阿闍梨御房

右大將家法華堂禪祿職事如元不可有相違之狀如件

建武元年十二月廿六日成親王左馬頭判

刑部僧都御房

是年左典厩受佛光禪師佛戒法成親王建武元歲甲戌左

佛光禪師正脉塔院碑銘云禪師諱祖元字子元號無學中略建武元歲甲戌左

武衛將軍源直義捨入豆州安久莊以追崇佛光禪師以師資之禮

建武元年十二月廿六日... 成親王... 左馬頭判... 刑部僧都御房... 是年左典厩受佛光禪師佛戒法... 佛光禪師正脉塔院碑銘云禪師諱祖元字子元號無學... 武衛將軍源直義捨入豆州安久莊以追崇佛光禪師以師資之禮

後鑑卷之五

尊氏將軍記第三上起建武二年正月

建武二年乙亥

正月小

七日卯辛此日於鎌倉御所御的始

大的日記云建武二年正月七日成親王將軍之宮御在鎌倉左馬頭為執權

小侍所澁川殿一番仁木次郎四郎義長佐竹常陸守二番佐竹五郎四郎佐貫左衛門

六郎三番長井四郎左衛門尉海老名尾張守四番金子十郎中村左衛門次

郎五番細川掃部助氏真田兵衛尉

九日癸巳此日佐々木四郎重宗卒

佐々木系圖云重宗太郎左衛門尉義重子四郎出家法名內阿建武二年二

月九日卒

十日甲午此日下河邊下野守顯助戰死

下河邊系圖云顯助四郎左衛門尉下野守從五位下建武二年正月十日先帝御方討死

十三日丁酉於内裏有御詠歌

新千載集慶賀部云建武二年正月十三日内裏にて竹有佳色といへる事を講せられけるに

百敷や生そふ竹の敷ことにかへらぬ千世の色そみへける

案風雅集以為建武元年事今係於此

二月大

是月關白道平公薨

東寺王代記云建武二年二月關白道平公薨四十

三月小

十七日庚子島津上總入道任大隅守護

島津文書載

所被補大隅國守護職也存其旨可致沙汰者天氣如此悉之以狀

建武二年三月十七日

左衛門權佐判

島津上總前司入道館

廿日癸卯被賞葉室右京大夫鎮西軍功給御書

葉室文書載

今度鎮西蜂起之砌被抽軍忠之旨義詮申越候武功之働驚入候自今以後卒爾之戰無用ニ候委細之儀武光エ申合候爲馬飼領玉名郡之内貳拾七町宛行候安堵之上者可謝芳恩候恐惶謹言

建武二年三月廿日

尊氏判

葉室右京大夫殿

廿八日辛亥此日爲慰鎌倉戰死亡靈寄地於寶戒寺

相州文書載

奉寄 圓頓寶戒寺

相摸國金目鄉半分事

右相摸守高時崇法名鑑天命已盡秋刑忽臻是以

當今皇帝被施仁慈之哀恤為度怨念之幽靈於高時法師之舊居被建圓

頓寶戒之梵宇爰尊氏奉武將之鳳 詔誅逆徒之梟惡征伐得時雄勇遂

功然間滅亡之輩貴賤老幼男女僧俗不可勝計依之割分金目鄉所寄寶

戒寺也是偏宥亡魂之恨為救遺骸之辜也然則

皇帝久施殷周之化愚臣且同伊呂之功仍奉寄如件

建武二年三月廿八日

參議源朝臣御判

圓頓寶戒寺上人

四月小

七日未千壽王叙爵

官位記云義詮建武二年四月七日叙從五位下歲六

五月小

七日戊子以相摸國糟屋庄田地被寄清水寺

勢州社家文書載

奉寄 清水寺

相摸國糟屋庄豐部鄉內雜色藤五跡田地事

右為祈一天之太平當家之長久所寄附如件

建武二年五月七日 參議御判

廿七日戊申佐竹常陸介歿

常樂記云五月廿七日佐竹常陸前司他界

六月大

九日未伊豫國越智安親上軍功申文給舊領案堵御書於山形吉內

水月古鑑載

亡父任遺言旨本知甲斐國府中領八百八拾貫所永相違有間敷狀如件

建武二年七月九日

尊氏公之御黑印

山形吉内

集古文書載

伊豫國在廳祝彦三郎安親申依當國謀叛人治罪事去四月二日三日馳
向楠窪并鉢野追退野臥等同七日既責寄赤瀧城同八日合戰之刻被疵
畢乳間同廿八日令致合戰忠勤以後致連日戰者也同六月三日至城郭
破却之時抽度々軍忠畢仍賜御證判可備後代龜鑑以此旨可有御披露
候恐惶謹言

建武二年六月九日

越智安親

御奉行所

檢了

判

十三日癸亥小山下野守秀朝於武州府中與北條時行戰敗死

小山系圖云秀朝左衛門尉貞朝子下野守屬尊氏建武二年七月十三日戰

死於武州府中

七月小

廿二日壬寅故相摸入道高時二子時行蜂起依之澁川刑部太輔義季於武州合
戰敗績自殺

太平記云相摸次郎時行ニハ諏訪參河守三浦介入道同若狹五郎葦名判
官入道那和左近大夫清久山城守鹽谷民部大輔工藤四郎左衛門已下宗
徒ノ大名五十余人與シテケレハ伊豆駿河武藏相摸甲斐信濃ノ勢共相
附スト云事ナシ時行其勢ヲ率シテ五萬余騎俄ニ信濃國ニ打越テ時日
ヲ替ス則鎌倉ヘ攻上リケルニ澁川刑部大輔小山判官秀朝武藏國ニ出
合是ヲ支ントシケルカ共ニ戰利ナクシテ兩人所々ニテ自害シケレハ
其郎從三百余人皆兩所ニテ討レニケリ又新田四郎上野國利根川ニ支
テ是ヲ防カントシケルモ敵目ニアマルホトノ大勢ナレハ一戰ニ勢力
ヲ碎カレ二百余人討レニケリ

天正本太平記云時行信濃國ヨリ起テ鎌倉ヘ攻入ケル直義驚騷テ躡テ澁川刑部大輔義季ヲ向ラルヘシトソ宣ヒケル義季ハ敵ノ勢ノ強大ニシテ而モ東國ノ兵共過分ハ内通ノ由ヲ聞給ヒシカハ馳向テ鬪フトモ利アラシト思ハレケレハ善惡ニ就爰ヲ最後ト思定テソ立レケル相從兵五百余騎建武二年七月二十二日武藏國女影原ニ馳著テ四隊ノ陣ヲソ張給ヒケル相摸二郎時行雲霞ノ勢ニテ先陣既ニ流鏑ノ聲ヲ發シ火出ル程ソ戰ヒケル義季ハトテモ腹切ント思定ラレタル事ナレハ自ラ敵ニ相當ルマテモナク自害セントシ給フ處ニ河原國小三郎誠ニ合戰キヒシカリケリト見ヘテ鎧ニ數多ノ矢折カケ馳來御方小勢ナルニ依テ戰難儀ナル由ヲ申ケレハ義季是ヲ聞給ヒテ合戰ノ吉凶ハ入マシ今度鎌倉ヲ出ルヨリ死ヲ一途ニ思定シカハ今更驚ヘキニ非ス愁ナル軍シテ力ヲ費シテ匹夫ノ矢サキニ懸ランヨリ自ラ死ヲ安クセント思フナリ汝ハイマダ新參ノ者ニテ見知者モ有マシ急キ此陣ヲ逃出テ鎌倉

ヘ馳參合戰ノ體ヲモ自害ノ様ヲモ委細ニ左馬頭ニ申其儘汝カ進退ヲハ心ニ任スヘシトソ宣ヒケル河原國畏テ御意トモ覺候ハヌ者カナ弓矢ノ道ニハ普代新參ト云事ハ候ハヌ物ヲサテハ能味鍊ナル者ト思召レ候ケルヤ且ハ御心中恐恥入テ候トテモ御腹召レ候ハ、冥途ノ先懸仕候ハント云モハテス馬上ニテ腹カキ切諸軍ノ死ニソ先タチケル義季是ヲ見給ヒテ感涙ヲ流シ是ソ士ノ義ヲ守リ節ニ死スト云手本ナルニイテサラハトテ帷幕ノ中ニ物具脱捨テ心閑ニ腹カキ切西枕ニソ伏給ヒケル

澁川系圖云義季丹波守貞賴子刑部大輔建武二年七月廿二日於武藏國女影原自害年二十三

廿三日卯此日於關東直義朝臣與北條時行戰於武州井手澤敗績奉成良親王及千壽王出走鎌倉使淵邊伊賀守義博戕護良親王梅松論云建武元年も暮けれハ同二年天下彌穩ならず同七月の始め信

濃國諏訪の上の宮の祝安藝守時繼か父三河入道照雲滋野の一族等高時の次男勝壽丸を相摸次郎と號しけるを大將として國中をなひかすよし守護小笠原信濃守貞宗京都へ馳申間御評定にいハく凶徒木曾路を経て尾張黒田へ打出へきかまからハ早々に先御勢を尾張へ差向らるへきとなりかゝる處に凶徒はや一國を相またかへ鎌倉へ責上る間澁川刑部岩松兵部武藏安顯原にをいて終に合戦に及といへども逆徒手まけくかゝりしかハ澁川刑部岩松兵部兩人自害を重て小山下野守秀朝發向せしむといへども戰難儀にれよひしほどに同國の府中にをいて秀朝を始めとして一族家人數百人自害すこれによりて七月廿二日下御所左馬頭殿鎌倉を立御向有し同日藥師堂谷の御所にをいて兵部卿親王を失ひ奉る御痛はしき申もなか／＼をろかなり武藏の井出の澤にをいて戦ひくらしけるに御方の勢多く討れし程に俄に海道を引退給ふ上野親王成良義詮六才にして同じく相伴ひ奉る

天正本太平記云去程ニ女影原合戦御方無勢ニテ難儀ナル由聞ヘシカハ直義重テ小山判官秀朝ヲ助ノ兵ニソ差下サレケル秀朝嚴命ヲ蒙テ一千餘騎ニテ馳下リ武藏國府ニ着テ相戦シカトモソレモ軍ニ利ヲ失ヒ秀朝腹切シカハ若黨五百余人同枕ニ自害シテ尸ハ路徑ニソ横ハリケル是ノミナラス新田四郎上野蕪河ニテ支戦シモ一戦ニ力ヲ失テ兵悉討レヌ又細川四郎入道モ病床ニ臥ナカラ敵陣ニ馳向ヒ其身ハ腹切若黨トモハ討死スサレハ所々ノ合戦ニ股肱ノ氏族耳目ノ勇士數ヲ盡シテ腹切討レシカハ直義カクテハ叶フマシトテ將軍官ヲ具足シ奉リ細川陸奥守顯氏ヲ御供ニテ七月二十三日曉天ニ鎌倉ヲソ落給ヒケル云々

太平記云左馬頭既ニ山内ヲ打過給ヒケル時淵邊伊賀守ヲ近附テ宣ケルハ御方無勢ニ依テ一旦鎌倉ヲ引退トイヘトモ美濃尾張參河遠江ノ勢ヲ催シテ頓テ又鎌倉へ寄ンスレハ相摸次郎時行ヲ滅サン事ハ踵ヲ

旋スヘカラス猶モ只當家ノ爲ニ始終讎トナラルヘキハ兵部卿親王ナ
 リ此御事死刑ニ行ヒタテマツレト云勅許ハナケレ共此次ニ只失ヒ奉
 ラハヤト思フナリ御邊ハ急キ藥師堂谷ヘ馳歸テ宮ヲ刺殺シ進ラセヨ
 ト下知セラレケレハ淵邊畏テ承候トテ山内ヨリ主從七騎引返シテ宮
 ノオハシケル牢御所ヘ參タレハ宮ハイットナク闇ノ夜ノ如クナル土
 牢ノ中ニ朝ニ成ヌルヲモ知セ給ハス猶燈ヲ挑テ御經アソハシテ御座
 有ケルカ淵邊カ御迎ニ參テ候由ヲ申テ御輿ヲ庭ニ昇居タリケルヲ御
 覽シテ汝ハ我ヲ失ハントノ使ニテソ有ラン心得タリト仰ラレテ淵邊
 カ太刀ヲ奪ハント走り懸ラセ給ヒケル淵邊持タル太刀ヲ取直シ御膝
 ノアタリヲシタ、カニ打奉ル宮ハ半年許牢ノ中ニ居屈ラセ給ヒタリ
 ケレハ御足モ快ク立セ給ハサリケルニヤ御心ハヤタケニ思召ケレ共
 覆ニ打倒サレ起舉ラントシ給ヒケル處ヲ淵邊御胸ノ上ニ乘懸リ腰ノ
 刀ヲ拔テ御首ヲカ、ントシケレハ宮御頸ヲ縮テ刀ノサキヲシカトク

ハハサセ給フ淵邊シタ、カナル者ナリケレハ刀ヲ奪ハレ進ラセシト
 引合ケル間刀ノ鋒一寸餘リ折テ失ニケリ淵邊其刀ヲ投捨脇差ノ刀ヲ
 拔テ先御心モトノ邊ヲ二刀サス刺レテ宮少弱ラセ給フ體ニ見ヘケル
 處ヲ御髮ヲ纏テ引舉テ則御首ヲ搔落ス牢ノ前ニ走出テ明キ所ニテ御
 首ヲ見奉ルニ嚙切ラセ給ヒタリツル刀ノ鋒イマダ御口ノ中ニ留テ御
 眼猶生タル人ノ如シ淵邊是ヲ見テサル事アリ加様ノ首ヲハ主ニハ見
 セヌ事ソトテ側ナル藪ノ中ヘ投捨テソ歸リケル
 常樂記云七月廿五日前兵部卿親王號大多和宮
於鎌倉奉誅
 廿八日申戌左典廐於海道處々合戰此日着三河國八橋注進其狀於京師
 梅松論云手越の驛に御着ありし時伊豆駿河の先代方寄來る間扈從の
 どもから無勢成といへども武畧を廻らして防戦ふ所に當國の工藤入
 江左衛門尉百餘騎にて御方に馳參りて忠節をいたしけるほどに敵退
 散しけり則宇津谷を越て三河國に馳附給ひて人馬の息を休め給ふ爰

に細川四郎入道義阿湯治の爲にとて相摸の川村山にありける處へ子息陸奥守顯氏のかたよりこれ迄無異に御上洛のよし使節をつかへしけるに我敵の中にありなから一功をなさらんも無念也又存命せしめハ面々心元なくれもふへし所詮一命を奉り思ふことなく子孫に合戦の忠を致さすへしとて使の前にて自害す此事將軍聞え召れ殊に御愁歎深かりき誠に忠臣の道といへども武くもあはれなりし事也されはにや合戦の度ことに忠功をいたし帶刀先生直俊左近太夫將監將氏等討死す天下靜謐の後彼義阿の爲とて子息奥州洛中の安國寺讚州の長興寺を建立せられ命一塵よりもろくして没後に其威上られしことありかたき事なりとそ人申ける

全勝院本太平記云カ、リケル處ニ宗ト頼レケル三浦介入道了存長江八郎左衛門入道榮遍等ヲ先トシテ時行ニ馳附シカハ御幼キ宮將軍並ニ千壽王丸ヲ具足シ申サレケレハ今是合戦ノ急ナル處ニテハ惡カリ

ヌヘシトテ先海道へ引退給フ駿河國入江莊ハ極タル難處ナリ伊豆駿河ノ軍勢心變シテ若道ヲ塞ンスラント士卒皆是ヲ危メリ是ニ依テ其所ノ地頭入江左衛門尉春倫カ許へ使者ヲ遣サレ憑ヘキ由ヲ宣ヒタリケレハ春倫一族等ヲ集是事如何有ヘキト意見ヲ問ケレハ一族皆申ケルハ關東再興時至ヌト存候只左馬頭ヲ討奉リテ相摸次郎殿ニ馳參セントソ申ケル春倫頃ク思案シテ天下ノ落居ハ愚蒙ノ我等カ知ヘキ處ニ非ス但義ノ向フ所ヲ思フニ入江莊ハ普代相傳ノ所領ナリ春倫ニ至テ已ニ十三代ソカシ而ルヲ相州禪門宗鑒近年當莊ヲ押領セラレシ條存外ノ處ニ一統ノ御世ト成テ法勝寺ノ上人信堯申沙汰有テ綸旨ヲ拜領仕リ一家ヲ養フ事是天恩ノ上ニ猶重ヲ重子タリ是時爭カ傾敗ノ弊ニ乘不義ヲ致スヘキ一門ノ人々ハ心々タルヘシ春倫ニ於テハ一人ナリトモ官方ニ參腹ヲ切ント打立ケレハ一族等實モト思ヒテ皆同心シケレハ家々ニ火ヲ懸興津宿ニ御座有ケル宮ノ御迎ニソ參リケルニ

十六日ニ酒匂宿ニテ防戦ケル鹽島三郎義久八條四郎守宇已下討レニ
 ケリ宮ヲハ御馬ニ乗セ奉リテ口ヲ引テ宗徒ノ人々ニハ吉良左衛門佐
 滿義上杉伊豆守重能細川兵部少輔顯氏舍弟卿律師定禪高美作守師秋
 仁木次郎四郎入道行應同民部大輔義仍同六郎忠長父子三人ヲ始トシ
 テ狗庭原ヘ打上リ給ヒケリ角テ手越宿ヲ宮ノ御陣ニ召レケリ同廿八
 日ノ早旦ニ多湖興津由井蒲原世戸湯原以下ノ國勢等雲霞ノ如ク押寄
 タリ細川兵部少輔顯氏卿律師定禪同舍弟彌四郎仁木次郎義長八條左
 近大夫義言中金孫次郎季通賀子十郎義俊以下馳向テ拒キ鬪フ定禪ハ
 舍兄顯氏ノ前ニ進出大長刀横タヘ下知シケルハ敵ハ大勢官軍ハ小勢
 ナリ敵ニ後ヲ圍ルナ笠驗ヲ守テ引組テ勝負ヲ決セヨ定禪後ニ續タル
 ソトテ四方ヲ斬テ旋リシカハ若干ノ大勢颯ト追散シ定禪創ヲ被リ勝
 鬪ヲ作テ各馬ヲ休ケル其後幾程ナクテ大勢又押寄タリ是ヲ見テ今度
 ハ上杉伊豆守並ニ高五郎左衛門一懸々テ見候ヘシ面々ハ姑御覽候ヘ

トテ懸出タリ佐竹石堂モ續タリ敵味方追ツ返ツ攻戦フカ、リケル處
 ニ清水五郎左衛門尉實宗ト名乗テ鎧ノ脇立ヲ腹ニ當テ馳廻リケルカ
 馬ノ前足ヲ切折レ三ツ足ニテ歩マセ我身モ左ノ頬ヲ小耳ノ後ヘ切附
 ラレ弓手ノ乳ノ上ツカレ赤キ血面ニテ栗生六郎入道道機ニ介錯セラ
 レテ來リタリ左馬頭一騎當千ト感シ給ヒケリ角テ參河ノ八橋ニ陣ヲ
 取暫汗馬ノ足ヲ息メ京都ヘ早馬ヲ立ラル

是月畠山兵部大輔經家戰死

畠山系圖云遠江下野太郎政經子經家兵部大輔建武二年七月討死

八月大

二日^{辛亥}左武衛^被任征東將軍有時行追討勅命此日東發

梅松論云關東の合戦の事先達て京都へ申されけるによりて將軍御奏
 聞ありけるハ關東にをいて凶徒既に合戦をいたし鎌倉に責入る間直
 義朝臣無勢にして防ぎ戦ふへき智畧なきによりて海道に引退きし其

聞のあるうへいどまを給ひて合力を加へきむね御申たひくにおよふといへども勅許なき間所詮私にあらす天下の御爲のよきを申捨て八月二日京を御出立あり此頃公家をそむき奉る人々その數をしらそありしか皆喜悅の眉をひらきて御供申けり
神皇正統記云建武乙亥の秋の頃ほひにしも高時か餘類謀叛をおこして鎌倉にいりぬ直義ハ成良の親王を引連申て三河の國迄のかれにき兵部卿護良の親王ことありて鎌倉におはしましけるをハ罪し申に及はま失ひ申てけり見たれの中なれと宿意をはたすにやありけん都にもかねて陰謀の聞へありて嫌疑せられける中に權大納言公宗の卿めしれかれしもこのまきれに誅せらる承久より關東の方人にて七代になりぬるにや高時も七代にて滅ぬれハ運のまからしむるかどハ覺ゆれど弘仁に死罪を定められて後信賴か時にころめつらかなる事に申侍りけれ成里の寄も久しくなり大納言以上にいたりぬるに同じ死罪

なりともあらハからぬ法令もあるにうけたまはりたこなふ輩のあやまりなりとを聞へし高氏ハ申うけて東國にむかひけるか征夷將軍並に諸國の惣追捕使を望みけれと征夷將軍になされてことくハゆるされす程なく東國ハまつまりぬ高氏望む所達せしめて謀反をおこすよし聞へける

太平記云是ニ依テ諸卿議奏有テ急キ足利宰相高氏卿ヲ討手ニ下サルヘキニ定リケリ則勅使ヲ以テ此由ヲ仰下サレケレハ相公勅使ニ對シテ申サレケルハ去ル元弘ノ亂ノ始高氏御方ニ參セシニ依テ天下ノ士卒皆官軍ニ屬シテ勝事ヲ一時ニ決シ候キ然ハ今一統ノ御代偏ニ高氏カ武功ト云ヘシ抑征夷將軍ノ任代々源平ノ輩功ニ依テ其位ニ居スル例勝テ計フヘカラス此一時殊ニ朝ノ爲家ノ爲望ミ深キ所ナリ次ニハ亂ヲ鎮メ治ヲ致ス謀士卒功アル折節ニ賞ヲ行フニシクハナシ若註進ヲ經テ軍勢ノ忠否ヲ奏聞セハ舉達道遠シ忠戰ノ輩勇ヲ成ヘカラス然

レハ暫東八箇國ノ管領ヲ許サレ直ニ軍勢ノ恩賞ヲ執行フ様ニ勅裁ヲ
成下サレ夜ヲ日ニ繼テ罷下リテ朝敵ヲ對治仕ルヘキニテ候若此兩條
勅許ヲ蒙ラスハ關東征罰ノ事他人ニ仰附ラルヘク候トソ申サレケル
此兩條ハ天下治亂ノ端ナレハ君モ能々御思案アルヘカリケルヲ申請
ル旨ニ任テ左右ナク勅許有ケルコソ始終如何トハ覺ケレ但シ征夷將
軍ノ事ハ關東靜謐ノ忠ニ依ヘシ東八箇國ノ管領ノ事ハ先子細アルヘ
カラストテ則綸旨ヲ成下サレケル是ノミナラス忝モ天子ノ御諱ノ字
ヲ下サレテ高氏ト名ノラレケル高ノ字ヲ改メテ尊ノ字ニソ成サレケ
ル尊氏卿東八箇國ヲ管領シテ所望輒ク道行ハレテ征夷將軍ノ事ハ今
度ノ忠節ニ依ヘシト勅約有ケレハ時日ヲ回サス關東ヘ下向セラレケ
リ吉良兵衛佐ヲ先立テ我身ハ五日引サカリテ進發シ給ヒケリ
金勝院本太平記云尊氏ハ八月二日京都ヲ立テ發向セラル相伴ヒケル
人々吉良上總入道慈仙足利尾張守高經畠山上野介重國三浦介高經同

下野入道道韋同織部佐高興大多和太郎兵衛乘續佐々木備中守時信同
佐渡判官入道道譽近江六角判官同加治源太左衛門鎮信結城七郎左衛
門尉千葉介貞胤宇都宮遠江守公利同參河守土肥兵衛尉實勝同次郎實
元足立安藝守遠宣長井治部大輔時晴小笠原七郎左衛門義充武田駿河
守政義土岐伯耆守秀教同美濃權守賴廣同兵庫助賴永同彈正少弼政利
遠山尾張守賴之高右衛門佐貞信同伊豫權守仁木伊賀守賴章同大膳大
夫賴任細川阿波守和氏同右京大夫義氏同玄蕃助尹隆同八郎隆友上野
左馬助義兼上杉彈正少弼朝定同大和守定包稻毛修理大夫幸富同兵庫
入道道勤葦田宮内少輔義方河野讚岐守通孝山名右京亮正杜京極出羽
前司秀邦葦名七郎匡親長尾左衛門府生敏藏南條左衛門佐宗喬南大内
記利純上杉畠山カ一族ヲ先トシテ出京ノ勢五千餘騎トソ聞ヘケル總
シテ近江美濃尾張參河遠江ノ勢馳附テ參河國ニ着給ヒケル時ハ三萬
餘騎ニ成ニケリ角テ直義尊氏ノ兩勢ヲ合テ五萬餘騎矢矧宿ヨリ取テ

歸シテ又鎌倉へ發向ス云々
八日^{丁巳}於遠江國橋本與東國凶徒合戰破之此後連戰皆捷
梅松論云三河の矢作に御着ありて京都鎌倉の兩大將御對面あり今當
所を立て關東に御下向あるへき處に先代方の勢遠江の橋本を要害に
搆て相支る間先陣の軍士阿保丹後守入海を渡して合戰をいたし敵を
追散して其身疵を蒙る間御感のあまりに其賞として家督安保左衛門
入道道潭か跡を拜領せしむ是を見る輩命を捨むことを忘れてういさ
み戰ふ當所の合戰を始めとして同國佐夜の中山駿河の高橋繩手篁根
山相摸川片瀬川より鎌倉に至るまで敵に足をためさせそ七ヶ度の戰
に討勝て云々
太平記云相摸次郎時行是ヲ聞テ源氏ハ若干ノ大勢ト聞ユレハ待軍シ
テ敵ニ氣ヲ吞レテハ叶ハシ先スル時ハ人ヲ制スルニ利アリトテ我身
ハ鎌倉ニ在ナカラ名越式部大輔ヲ大將トシテ東海東山兩道ヲ推テ攻

上ル其勢三万餘騎^{中略}夜ヲ日ニ繼テ路ヲ急ケル間八月七日前陣已ニ遠
江佐夜中山ヲ越ケリ足利相公此由ヲ聞給ヒテ六韜ノ十四變ニ敵長途
ヲ經テ來ラハ急ニウツヘシト云ヘリ是太公武王ニ教ル所ノ兵法ナリ
トテ同八日ノ卯刻ニ平家ノ陣へ押寄テ終日戰暮サレケリ平家モ此ヲ
專途ト心ヲ一ツニシテ相當ル事三十餘箇度入替々々戰ケルカ野心ノ
兵後ニ在テ跡ヨリ引ケルニ力ヲ失ヒテ橋本ノ陣ヲ引退キ佐夜中山ニ
テ支タリ源氏ノ眞前ニハ仁木細川ノ人々命ヲ義ニ輕シテ進ミタリ平
家ノ後陣ニハ諏訪祝部身ヲ恩ニ報シテ防戰ケリ兩陣互ニ勇氣ヲ勵シ
テ終日相戰ケルカ平家此ヲモ破ラレテ箱根水飲峠へ引退ク此山ハ海
道第一ノ難所ナレハ源氏左右ナク懸リ得シト思フ處ニ赤松筑後守貞
範サシモ嶮シキ山路ヲ短兵直ニ進テ敵ノ中へ懸入テ前後ニアタリ左
右ニ激シケル勇力ニ拂ハレテ平家又此山ヲモ支ヘス大崩マテ引退ク
清久山城守返シ合テ一足モ引ス鬪ケルカ源氏ノ兵ニ組レテ腹切ル間

モヤ無リケン其身ハ忽ニ虜ラレ郎從ハ皆討レニケリ路次數箇度ノ合
 戰ニ打負テ平家ヤタケニ思ヘトモ叶ハス相摸河ヲ引越テ水ヲ阻テ支
 ヘタリ折節秋ノ急雨一通シテ河水岸ヲ浸シケレハ源氏ヨモ渡シテハ
 懸ラシト平家少シ油斷シテ手負ヲ扶ケ馬ヲ休メテ敗軍ノ士ヲ集ント
 シケル處ニ夜ニ入テ高越後守二千餘騎ニテ上ノ瀬ヲワタシ赤松筑前
 守貞範ハ中ノ瀬ヲ渡シ佐々木佐渡判官入道道譽ト長井治部少輔ハ下
 ノ瀬ヲ渡シテ平家ノ陣ノ後ヘ廻リ東西ニ分レテ同時ニ関ヲトツト作
 ル平家ノ兵前後ノ敵ニ圍レテ叶ハシトヤ思ヒケン一戰ニ及ハス皆鎌
 倉ヲ指テ引ケルカ又腰越ニテ返シ合テ葦名判官モ討レニケリ始遠江
 ノ橋本ヨリ佐夜中山江尻高橋箱根山相摸河片瀬腰越十間坂此等十七
 箇度ノ戰ニ平家二萬餘騎ノ兵共或ハ討レ或ハ創ヲ被リテ今僅ニ三百
 餘騎ニ成ケレハ諏訪三河守ヲ始トシテ宗徒ノ大名四十三人大御堂ノ
 内ニ走入リ同ク皆自害シテ名ヲ滅亡ノ跡ニソ留ケル其死骸ヲ見ルニ

皆面ノ皮ヲ剝テ何レヲソレトモ見分サレハ相摸次郎時行モ定テ此内
 ニソ在ラント聞人哀ヲ催シケリ

常樂記云八月十八日

鎌倉先代余類

廿日先代沒落

北條系圖云時行相摸守高時二子次郎中先代中興其間十三也童名金

嘉丸又曰龜壽丸文和二年五月廿日於龍口被誅

三浦系圖云時繼從五位下時明子法名道海與力中先代於尾州熱田被虜

於六條河原被誅三浦介從五位下

蘆名系圖云盛貞葦名遠江守盛宗子二郎左衛門尉大夫判官遠江守建武

二年八月十七日夜中先代蜂起尊氏方トメ於片瀬浦父子討死號正傳庵

月浦道圓子次郎左衛門高盛十八歲同父討死

十九日辰左武衛兄弟使入鎌倉給

梅松論云八月十九日鎌倉へ攻入給ふとき諏訪の祝父子安保次郎左衛
 門入道道潭か子自害す相殘るともから或ハ降參し或ハ責落さる去程

に七月のすゑより八月十九日に至迄廿日餘かの相摸次郎ふたゝひ父祖の舊里に立歸るといへどもいく程もなくして没落しけるそあはれなる鎌倉に打入輩の中に曾て扶佐する故老の仁かし大將と號せし相摸次郎も幼稚なり大佛極樂寺名越の子孫とも寺々に在いて僧喝食にかりて適身命を助りたる輩俄に還俗せといへどもそれとまられたる人なけれハ鳥合梟惡の類其功をなさりし事誠に天命にそむく故とそおほゑし是を中先代とも廿日先代とも申也去程に將軍御兄弟鎌倉に打入二階堂の別當に御座ありしかハ京都より供奉の輩は勳功の賞にあつかる事を悦び又先代與力の輩ハ死罪流刑を宥められけるほどに先非を悔ていかにも忠節を致さんことをれもハぬ者ころなかりけれ京都よりハ人々親類を使者として東夷誅伐を各賀し申さる常樂記云八月十九日諏訪祝等滅亡

廿七日^{丙子}被寄武藏國佐々目郷於鶴岡八幡宮

鶴岡八幡宮文書載

寄進

鶴岡八幡宮

武藏國佐々目郷^{美作權守知行分}

右爲不冷座本地供祈所奉寄之狀如件

建武二年八月廿七日

晦日^卯左武衛依勳功賞被叙從二位

公卿補任云源尊氏八月晦日叙從二位勳功賞

此頃勅使中院中將具光下向鎌倉召左武歸京武衛不奉勅命

梅松論云勅使中院藏人頭中將具光朝臣關東に下着し今度東國の逆浪速にせいひつめる事叡感再三也但軍兵の賞にをいてハ京都に在いて綸旨を以宛行へきなり先早々に歸洛あるへしとかり勅答にハ大御所急き參るへきよし御申有ける所に下御所仰られけるハ御上洛然るへ

からず候其故ハ相摸守高時滅亡して天下一統に於る事ハ併御武威に
 よれりまかれハ頻年京都に御座有し時公家並義貞隱謀度々に及とい
 へども御運によつて今に安全なりたま〜大敵の中をのかれて關東
 に御座可然旨を以堅いさめ御申有けるによつて御上洛をど〜められ
 て若宮小路の代々將軍家の舊蹟に御所を造られしかハ師直以下の諸
 大名屋形軒をならへける程に鎌倉の體を誠に目出度う覺へし
 保曆間記云同廿八日相摸次郎鎌倉へ打入關東ノ侍並在國ノ輩ハ皆鎌倉
 ニ付テ天下又打取メ見エケル程ニ京都ノ騷動不斜其時尊氏罷向フヘ
 キ由仰ラル直義打負テ落上ハ申請テ罷向ヘキ由存候但頼朝例ニ任セ
 征夷將軍ノ宣旨ヲ蒙ラント申所ニ叶ハスシテ征夷將軍ノ官ヲ送ラル
 無念ニ存ナカラ既ニ尊氏ハ發向シケリ直義ニハ三河國ニシテ行逢共
 ニ下向ス海道所々ノ合戦ニ打勝テ諸人尊氏ニ降參ス尊氏ハ忠又重疊
 也然ル處ニ故兵部卿親王ノ御方人臣下ノ中ニヤ有ケン尊氏謀叛ノ志

アル由讒シ申テ新田右衛門佐義貞ヲ招テ種々ノ語ヒヲナシテ左中將
 ニ申成テ上野國ハ尊氏分國ナリ義貞ニ申充ケリ何ナル明主モ讒臣ノ
 計申事ハ昔モ今モ叶ヌ事ニテ尊氏上洛セハ道ニテ打ヘキ由ヲ義貞ニ
 仰スサテ尊氏ヲ京都ヨリ召ル勅使藏人中將源具光ナリ關東勢ヲハ直
 義ニ附置一身急馳參スヘシト云々尊氏勅定ニ應シテ上洛スル所ニ京
 都ヨリ内々此事ヲ告申ケル人モ有ケルニヤ又直義モ東國ノ侍モ不審
 ニ思ヒテ留メケレハ尊氏上洛セス云々
 是月以斯波陸奥守家長補奥州管領

南方記傳云八月尊氏陸奥守家長を奥州の管領として斯波の館におく

